

## 一章

「旦那様……っ♪心の準備は出来たか……?」

「ご主人様……っ♥私と美桜のことを……たっぷり可愛がってくださいませ……っ♥」

あなたの前で、今——

白無垢を着た二人の美女が、三つ指を突いているのだ。

分厚い布地越しにも、豊満であることがわかる爆乳だ。身体つきは媚肉にたっぷりと満ちあふれていて——テレビで見る女優よりも、遥かに優れた容姿をしている二人の美少女。

それが今、あなたの前に三つ指を突き——

これから食べられる気満々であるという事実に——

「……んっ♥大きくなってるとな……っ♥」

「お姉ちゃん達のこと……えっちな目で見てるの?」

あなたの肉棒は、最大硬度まで隆起をする。

後ろにずりずりと退くのは、本能的なものだ。あなたの中に眠る未成熟な雄は、この快楽を知れば

——それはアヘンや覚醒剤のように、二度と抵抗が出来ないと知っているのだろう。それでも——

嗚呼、二人の美少女は、あなたを極楽に連れて行くためにずりずりと近寄っていき——

”とんっ”

と、あなたの背中では壁にぶつかり——

「ほらほら♡どうした……？お姉ちゃんって……したくないのか？」

「え〜？……お姉ちゃんのこと……ぱっくんしてもいいんだよ……っ♡」

二人の美少女は、白無垢をただけさせて乳房を露出させる。

柔らかく、たぶたぶで、ずっしりと媚肉が詰まったそれは――

彼女達と共に入るお風呂で、幾度となく味わうことが出来た代物。

最近は、あなたは一人で風呂に入ろうとするのだが――彼女達はそれを許してくれない。「二人はもうお風呂を済ませたから」と言われて油断をすれば「ジュースをこぼして汚れたから」と言い訳をして、お風呂に乱入してきて、あなたのことを可愛がってきてくれて――

だから、今日もそれだと思っていたのだ。

あなたが逃げてても、抵抗をしても、まるで意味の無い――

絶対的な独裁による、二人の寵愛。

さながら”逆レイプ”とでも言うべき、二人のご奉仕を堪能できるはずなのに――

二人は――

”じゅ……っ”

「……んっ？どうした……？」

「……お姉ちゃんに……何してほしいの？」

微動だにせず、あなたを見つめ続けるのだ。

目の前にある二つの乳房×2の、四つの媚肉を貪る権利はあなたに捧げられているのだ。

なのに、二人の少女は動きを止める。

呼吸の度に、胸元が膨らみ、乳房がふるふると揺れる光景が存在するのに——  
何もしてもらえない、と言う状況で、ようやく——

「ほら……貴様から触るんだぞ……っ♡」

「……いいよっ♡触っても、怒らないから……っ♡」

二人は——

あなたに、乳房を触らせようとしているのだと気が付いた。

絶対的な権力を持つ、二人があなたにセクハラをするのではなく——あなたが、あなたの意志で乳房を揉むことを強制されているのだ。期待と興奮に満ちた上目遣いで、あなたを見つめてくる二人の美少女。肉棒がはち切れんばかりに膨張して、痛みを訴えるので——

あなたは、どうしてこうなったかと——

そればかりを、考えた。

女というのは「ガキを孕むための穴っぽこ」であるというのが、あなたの生まれ育った環境であった。

政令指定都市から電車で三時間ほど揺られて、そこからバスで二時間揺られた先にある村が、あなたの生まれ育った土地だ。インターネットもスマートフォンもあるが、現代的な価値観とは遠くかけ離れた場所。国が定めた法律よりも、村の因習の方が上に位置する歪な環境では、外の世界の情報を取捨選択することなど出来るはずもない。

あなたの親は幸いにも、外の世界を知っていた。

自分が物心も付かないうちに亡くなった祖母の介護のために、東京に出ていた両親が村に戻ってきたのだ。二人の両親にとって、この村がおかしいことは理解していても——圧倒的な大波に、個人が出来る抵抗は、「せめて、自分の息子にまともな価値観を植え付けることだけ」であり——

だから——

窮屈すぎる閉塞感は、全身を徐々に蝕んでいくのだ。

小学校の帰り道を、あなたは一人で歩いてきた。

村の風習が当然のものだと思いついでいる、クラスの男子とは話しているだけで胸くそが悪くなり——そんな正義感を持っていながらも、何一つ行動をせず、何も出来ない自分自身に反吐が出るので女子と話すことも出来ない。一人ぼっちであるのは、しかし、狂人に引き込まれるよりは遥かに快適であり、あなたはぼっちライフを満喫していたのだが——

「おお、春野んとこの坊ちゃんだねえがっ」

「どうだ、坊ちゃんもやってかねえか？」

帰り道――

河川敷の下で、宴会が開かれていたのだ。

昼間から酒を飲んでいる彼らを、落伍者として見てはいなかった。村の人間が、彼らをどう噂しているかと、あなたの親は自身の子が偏見を持つことは許さなかった。だから、彼らには普通に接していたし――それが、彼らに「春野んとこの坊ちゃん」と呼ばれて、懐かれる理由になったのかも知れないが――

”ばちゅんっ♡どちゅっ♡ぐぶっ♡ぶじゅっ♡じゅぶっ♡”

「おっ、おっ、締まりがいいなあ〜……っ♪ガキに見られて興奮してんのか、ええっ!？」

「んぐっ♡ぐぶっ♡おっ♡おっ♡おぼ〜……っ♡んぐぐ……っ♡」

五人ほどの集まりの中心で――

一人の女が、犯されているのだ。

四〇代半ばと言ったところか。肌にはシミが浮かんでいて、身体の肉も弛んでいる。あなたの母親と同年代であろうが、しかし、彼女とはまるで違う醜悪な肢体は――

おそらく、まともな愛情を受けていない証拠だ。

集団で輪姦されながら、子供のあなたに見られているというのに――女の方は、それを少しも意に介すことはない。膣と口の二穴に肉棒を挿入されているのだが――口の方で男が射精をしたのだろう。男がブルブルと身体を震わせて、精液を流し込んでいるのがわかる。その汚い子種を、彼女はいつも

容易く”ごっくんっ♡”と喉を鳴らして飲み込んで――

「春野の坊ちゃん、あんたもどうだい？今ならまだ二発しか出されてないから、綺麗だよ？

あんたも極楽に連れてったげるからさあ……っ♡」

にやあ、とあなたに向けて笑みを浮かべるのだ。

脳裏に浮かんだのは、絵本の中の魔女だ。

迷い込んだ村人を閉じ込めて、大釜でコトコトと煮込んでスープにして食べてしまう魔女。勿論、その魔女は後々主人公に退治をされるのだが――幼かった頃のあなたには、主人公の活躍に至るまでの助走の部分でつまずいて、怖くて泣いてしまったことを思い出して――

世界の全てを諦めて、壊れてしまった瞳に見つめられて――

あなたは、息をすることも出来なくなるのだ。

どうにか絞り出した言葉は――”自分には婚約者がいるので”という堅苦しい返答。一人の男性は「おいおい、坊ちゃん、あの娘ら独り占めする気か〜!?」と野次を飛ばすが、もう一人の男性は「いやでも……まあ、あの二人ならそうなるよなあ」と諦め気味に答えて「俺だって、こんなババアよりも若い双子のがええもんなあ」と答えたのは、その”ババア”に肉棒を抽送している男だった。

あなたは一礼をして、その場を立ち去り――

振り返って、彼らが見えなくなってから――

全力疾走で、駆けた。

十二歳の自分が、何を出来るはずもないと知っている。

倍の年齢でもまだ無理で、三倍の年齢ならば最短距離を通過してどうにか。四倍の年齢でようやく発言権を得て、五倍の年齢で初めて村の改修に取り掛かれると知っていたのだ。

自分があるいは、歴史に名を残す主人公であれば――

きつと何らかの良案が浮かんだのだろう。

歪んだ因習に囲まれた村に正常を取り戻す――、一冊の小説のような解決法。

だが、自分にそんな器がないことは、自分が一番知っている。

この村では――

女には、基本的人権が存在しないのだ。

古い時代の男尊女卑の価値観を――更に、閉塞的な村で過激に煮込んだ代物だ。男は働き手であり、戦争の際には徴兵されて国を守るのだから――それに見合う仕事を女は出来るはずもない。女は男にとつての慰みものに他ならず、故に、人権など唾棄すべき代物であるという価値観だ。

十八歳になった女は、村の男に嫁ぐことになり――

そこで完全に人権は消失される。

とは言えど、日本国の民法や刑法や憲法のように、厳密にルールが定められているわけではない。

殴るや蹴る程度のことならば黙認をされるが、流石に殺害まで行くと村で庇ってやることも難しいのだが――

少なくとも、この村においては——

「ただ、女に生まれた」というだけで、人生の多くを諦めなくてはいけないのだ。

洗脳の恐怖は、村の因習がおかしいことに気が付けないということだ。村で生まれ育った女達は、生まれたときから「それが普通のこと」という認識をしている。朝起きれば歯を磨くように、眠る前にはトイレに行くように、「それが普通のこと」という価値観を抱いてしまえば。むしろ「ああ、女に生まれたというだけで、労働や徴兵から逃れられるなんて、どれだけ幸せだろうか」と——人権を奪われるその行為に感謝をしてしまうわけであり——

だから——

あなたは、幼いときから村のことが嫌いで嫌いでしょうがなかったのだ。

自分のこの価値観が、村の外を経験した両親から受け継いだ「洗脳」であることは理解している。常識というものは、時代と場所と宗教によって幾らでも変わるのだ。あなたが属している常識が、日本において大多数側であるというだけの話。

村には、真の意味での悪人はおらず——

一番老齢の長老ですらも、彼が生まれたときには、村は既に淫習に染まっていたのだ。

法律と規律を遵守することは、決して悪いことではなく——正しいことなのだ。もっとわかりやすく「げくひげひげひ、村のいい女は全部俺様のもんだげひく」と高笑いをする悪役がいれば、そいつを退治すれば解決する物語でも——

実際には、村を形成するほとんどの人間は善人に位置するのだ。

五人の男性が、一人の女を輪姦していた先ほどの光景も——彼らのそこには一切の悪意は介在していない。「お前のとこの嫁の穴を借りたから、次は俺の嫁を貸してやるよ」と、ポケットティッシュでもやりとりするような気軽さであり——この村で育ち、その価値観に染まった女も「それは当然じゃないか」と思っているわけで——

それが——

あなたには、たまらなく辛いのだ。

あなたの最愛の二人の少女まで——

村の淫習の犠牲になるのを、見届ける他にないからだ。

息が切れて立ち止まり、あなたは膝に手をつく。

いつの間にか、家に到着していたらしい。

心臓に手を当てると、バクバクと暴れて、今にも飛び出してきそうだ。

あなたは深呼吸を、何度も何度も繰り返す。

自分が抱えているこの違和感は、胸に秘めている限りは罪にはならないのだ。因習に逆らう人間を村八分するそれだって、本音ではみんな「やらないで済むなら、それに越したことはない」と思っているし——だからこそ年寄りの集まる集会で、土下座をして詫びれば解除されるというルールもあるのだ。わかっているのだ。誰しもが、思うがままの人生を歩むことなぞ出来るはずもなく、自分が生まれ育った環境を受け入れるほかにない——

どうしても、わかっているのだが——

「うんっ?……ああつ、今帰ったのか?」

「……どうしたの? 具合、悪いの?」

二人の美少女が——

夕陽を逆光に、立っていた。

白セーラー服を着用した二人の美少女は、背筋をピンと伸ばした凛々しい立ち方をしている。

幼い頃から、剣道と華道を厳しく叩き込まれている二人。優秀な女というのは、それに釣り合う、優秀な雄に嫁がされるのが村の因習だ。だからこそ、各家庭は自分の家に娘が生まれた後は、様々な習い事をさせるのだが——閑話休題。

二人の少女はあなたの手を握り——

「腹が痛いのか?……ふふっ、後で撫でてやるからな?」

「お薬飲もうねー……? 苦いけど……ごっくんできる?」

そのまま、あなたを家の中に連れ込むのだ。

二人の少女の顔を、あなたは見上げる必要があるのだ。

170センチには至らない程度の二人ではあるが、あなたは男の身なれど未だ成長途上だ。彼女達はあなたを椅子に座らせる。ポニーテールの、武人風の彼女は水をコップに注ぎ——サイドに編み込みが入った、お淑やかな雰囲気彼女は常備薬をあなたに手渡す。

そして——

「ほら……っ、どうした?……また、薬が飲めなくなったのか?」

「ちっちゃかった頃……そうだったよね……ゼリーで包んであげないと飲めなくて……」

二人の少女は――

それが当然、とでも言うように椅子を引いてあなたを挟み込むのだ。

圧倒的に大きな乳房が、あなたの隣に存在する。

田舎の学校であるので「身体のサイズにあった制服をオーダーメイド」という概念は存在しない。それもまた、あるいは身長250センチの巨人であれば話は別かも知れないが――

「身体の方を制服に合わせろ」というのが、町で唯一の衣料品店のルールなのだ。

だから――

二人の制服越しの乳房は、布地をパツパツに引っ張り上げているのだ。

ボタンが千切れることは、日常茶飯事。二人の少女はこれ以上胸が大きくならないようにと、本気で、ネットの”バスタダウンマッサージ”を行っているほどで（勿論、効果は少しもなく、乳房はどんどん大きくなっている）あり――

元々の爆乳と、既製品の制服はどうしたところで――

股間に肉棒を生やしてきた雄を、緊張させる代物なのだ。

あなたは動揺を――

錠剤の胃薬と一緒に”ごっくんっ”と飲み込んだ。

「ふふっ……少し手こずったが、飲めたな……偉いぞっ♪」

「かっこいいー、お薬飲めるなんて、すごーい」

「ああ、とくつてもかっこよかつたぞっ♪お姉ちゃん達は、かっこいい弟がだくすきだからなっ  
「んふふ〜…つ、お姉ちゃん、弟くんのこと…もーつと好きになっちゃったかもー」

二人の少女は――

未だに、あなたのことを幼子であると思っているのだ。

予防注射は今でも嫌だが、それでも、目を瞑って我慢して耐えることが出来るようになったのだ。  
なのに、二人の記憶は未だに「予防注射ではぎゃんぎゃんと大喚きして、粉末状の薬でないと飲まず、  
錠剤を飲ませると”ペっ”と吐き出す傍若無人な天使」から脳内情報をアップロードしていかないら  
しい。二歳のときは、薬を飲むだけで褒めてもらえるそれが嬉しくて、無邪気に手を叩いていたのかも  
知れないが――、十二歳になってそれは、流石に、気恥ずかしさで一杯になるのだ。

二人は、あなたの二の腕を胸元に抱いて――すりすりと頬ずりをしてくる。

その距離感――あなたのことを、異性として見ていない最大の証拠だ。

あなたも二人の少女をエロい目で見てはいけなさと、理解をしている。

彼女達が美しいのも、乳房が大きいのも――

こんなクソみたいな村に生まれたことも、二人には一切の責任がないのだ。

あなたは――

二人の姉の弟として――我慢をしなくてはいけないのだ。

明日には、二人の少女は十八歳の誕生日を迎えるが――

誰かの嫁になるそれに、あなたは、一つの文句を言う権利もないのだ。

武人風のポニーテールの彼女は、先にシャワーを浴びると行って姿を消して——残されたのはあなたと、サイドに編み込みが入っている少女だけ。彼女は水を入れた麦茶を一息で飲み干して、からんと氷の音を手持ち無沙汰に鳴らしている。

「……お姉ちゃん……明日、お嫁さんになっちゃうねー？」

彼女は——

机に寝そべりながら、あなたを見つめている。

蛇に睨まれた蛙——と言うことわざを、あなたは深く理解していなかった。確かにこの田舎は、夏の夜などはカエルの大合唱が響いているが、インドア派のあなたにとって蛇は年一程度でしか見ることがない生き物で——更には、都合良く蛇がカエルを睨んでいる瞬間など目撃することもないのだと——

初めて言葉を知ったときから、ずっと考えていたのだが——

「……その前に、お姉ちゃん達に言っておくこと、あるー？」

あなたは——

春野家次女の、春野桃華に見つめられて指先一本動かせないのだ。

間延びした言葉遣いで、おっとりとした雰囲気を出す彼女は——”ぷち、ぷち”とブラウスのボタンを外していく。あなたの視線は当然——その谷間に、吸い込まれていく。豊満で、大きな乳房。一緒にお風呂に入るとき、彼女はあなたと密着することを望んでいる。幼子のときには嬉しかったが、性の芽生えと同時にそれが気恥ずかしくなり——しかし、彼女はあなたを逃がしてくれない。

ふんわりと、柔らかか、まあるいおっぱいは——

92センチのGカップだ。

あなたを挑発するような上目遣いで、桃華はボタンを外していく。

彼女のそこが、これから、他の雄に奪われるのだと思うと——先ほど葉を飲んで鎮めたばかりの胃が、またキリキリと痛みを訴えてくる。それを否定して、彼女に因習を拒絶させたところで——

待ち受けているものは、何も無い。

この村で生まれ育った人間に、それを拒否することは出来ないのだから。

「仕方ないから」で諦める他にないのが、傷を最小限に収めるものであり——

だから——

あなたは、桃華に何も言えないのだ。

「……そっか」

彼女は、ぼつりと一言呟くだけ。

そのまますぐに、彼女は立ち上がり——風呂場へと去って行き——

「んっ？どうした？桃華と何か喋っていたのか？」

もう一人の姉である——

春野美桜が、姿を現す。

「脚を崩していいよ」と言われても、常に正座で背筋をピンと伸ばしている彼女。

それでも——

身内の前では穏やかな笑顔を浮かべて、今はバスタオル一枚で油断した姿。

桃華と母親が見ている前では絶対にしないのだが——冷蔵庫の牛乳が残り一人分だと知って、彼女は直接紙パックに口を付けてそれを飲み干す。あなたの前でだけ見せる、春野美桜という少女の油断。それを見る権利が与えられるのは、世界中のどんなプレミアムチケットよりも誇らしく、嬉しいことであるのだが——

「……飲みたかったのか？」

あなたの視線を、彼女は「牛乳を奪られた」と解釈するらしい。

美桜はあなたの隣に腰掛けてくる。

お風呂上がりのぼかぼかの肌は、桜のような桃色に紅潮している。バスタオルを一枚隔てた先に、美桜の全裸があるのだ。普段はポニーテールで露出しているうなじも、風呂上がりで髪を結ばなければ隠れる。極上の美少女というのは「うなじが見えない」で男を誘惑するのかと、あなたは不思議な感心を抱くのだ。

「……明日、私は人妻になるんだな……」

ぼつり、と美桜が呟いた言葉。

あなたは”びくりっ”とその場で肩を弾ませるが——

その葛藤は、先ほどたつぷりと済ませてきたのだ。

嫌だと嘆くことで救われるのなら、喉から血反吐が出るまで叫んでやるのだが——

美桜の決意を揺るがせることは、彼女を傷つける結果にしかならず——

だからあなたは、血が滲む勢いで拳を握って——爪を掌に食い込ませるのだが——  
「……なあ？お姉ちゃんがお嫁さんになっても……いいかな？」

美桜が尋ねてきた言葉に——

あなたは、肯定も否定も出来ず無言を貫くしか出来ないのだ。

「この町の因習は最高だよ」「お姉ちゃんも頑張って嫁いできてね」と背中を押せないのは、弟として不幸者であることは理解している。自分がせめて、彼女達よりも先に生まれていれば。村八分を受け入れるか、あるいは村の外への脱出が出来るのかもしれないが——、小学生の身である自分に出ることが、何か一つとして存在しないことは重々に承知しているのだ。

美桜も、それ以上の無理強いをすることはないように——

あなたの頭に、手を伸ばしてくる。

彼女達のさらさらな髪の毛とは違う——まあ、普通の頭だ。一日を過ごして、体育の授業もあつたので、多少は汗でベトベトかもしれない。それでも美桜は慈しむように、何度も何度もあなたの頭を撫でて——やがてシャワーを終えた桃華も混ざって、あなたの頭を撫でてきて——湯冷めした二人はやがて、もう一度、風呂場へと姿を消していった。

窓から射し込む月明かりだけが、あなたの部屋を照らしている。

いつもは、遅くても夜の十時には眠っているのだが――

今は、夜の八時。

就寝するには早いですが、しかし、何かをする気力も残っていないのだ。

電灯の消した部屋でベッドに寝転がり、ぼんやりと天井を見上げている。

長女春野美桜と、次女春野桃華は――

明日、十八歳の誕生日を迎えるのだ。

この村の掟で、十八になると彼女達は男に嫁ぐ必要があるのだ。

人権を喪失とは言うが、正確には「旦那になる男に人権を譲渡する」というものであり、だから二人の少女は今までは保護されてきた。特に――彼女達のような、胸の大きな極上の美女二人だ。

男達はどうにか媚びを売って、恩を売って、二人に選んでもらいたいのだ。

春野家は、元々この村の土地の多くを所有していた。

先祖が大地主であり、村の人間にとっては頭が上がない存在。あなたの両親は一度、村を出て東京に行っていた人間であり、言わば”出戻り組”であるのだが――

その分を差し引いた上でも、村では「春野」の名は十分に通用するのだ。

そんな家の極上の美少女二人というのは――

男にとって、孕ませたくないはずがないのだ。

彼らは春野美桜と、春野桃華に媚びを売って彼女達に自分を選んでもらおうとしている。

勿論、彼女達は村きつての極上の美少女だ。「こいつと結婚するの嫌だから自殺します」とでもなれば、それがどれだけ大きな損失であるのか、誰でもが理解出来るだろう。村の男達は、二人と結婚できるのが最善であると思いつながら——「誰かと結婚した美桜と桃華を貸してもらえらること」が次善であると知っているのだ。

考えれば考えるほどに——

美桜と桃華に待ち受けている未来は、この村の因習さえ肯定出来れば、悪くはないものなのだ。

村長のところの孫が、一番の候補だろうか。確か、二人と同級生だったはずだ。顔が広く、悪いグループとの付き合いもあると噂を聞くが——全ては、噂に過ぎない。確たる証拠を突きつけられるならばともかく、あなたはライトノベルの主人公ではなく——その要求を突っぱねられるほどの権力もないのだ。ああ、ああ、美桜も桃華も、他の男にその肢体を貪られるのだろうか。剣道一筋で、いじめっ子を相手にも一步も引かず、あなたにとつての憧れである春野美桜も——どこかふんわりとした雰囲気を保ち、茶道や華道を一通り習得していて、どこに出しても恥ずかしくない春野桃華も——その肢体を、他の男達に貪られるのだ。美桜の96センチHカップも、桃華の92センチGカップも、あなたではない男のものになるのだ。あなただけが経験していい「一緒にお風呂」も、彼女達はこれから、全裸になりしずつと男の背中を流して——

そのまま、肉欲のままに貪られるのだと思うと——

ちくしょう——

どうしても、勃起が収まらないのだ。

いっそ死にたくなるほどの絶望を抱えながらも、自分が死んだときに一番悲しむのが二人だと、あなたは知っている。どうして自分の身体は、美桜と桃華が他の男に嫁ぐことに興奮をするのかと、憤るのだが――

” こん、こん ”

「……起きてるか？」

扉のノックの音が響いて――

あなたは、緊張に上擦った声で返答をする。

ぎい、と建て付けの悪い扉が開いて、電灯が点けられて――

「ごめんねー……もう、寝てた？」

二人の美少女が、あなたの部屋に入ってくる。

「よちよち歩きの幼子の頃は、こっちの都合に構わず、お姉ちゃん達の部屋に来たがった。拒んだらぎゃあぎゃあ泣いて喚いて文句を言ったから――その分の差し引きで、お姉ちゃん達は弟くんの部屋に自由に入れる」というのが美桜と桃華の理屈。なのであなたは、オナニーをするときにも最大の緊張感を抱かねばならなかったのだが――

二人の少女には珍しく、ノックをしてきたのだ。

何かがある、とあなたは身構えて息を呑んだのだが――

「……んっ？……そうだな、家の中で制服だと……不思議な感じがするな」

「可愛いよねー……この制服……っ♪弟くんは……お姉ちゃん達の制服……好きー？」

美桜と桃華は――

制服を着用して、あなたの前に立っているのだ。

道ばたで遭遇したり、学校帰りであれば一切の違和感はないのだが――

自分の部屋で制服を着ていると、まるで、この場がそういうお店のように感じられる。

スマートフォンの中のえっちなビデオを彷彿とさせる代物であり――

あなたは、慌てて布団を引き寄せて股間を隠すのだが――

「……いやはや、勘違いしているとは思っていたが……まさか、誰も伝えていなかったとはな……」

「びっくりだよね……お母さんも、伝えてくれてもよかったのになー」

「母さんからは言いにくいことだろう……んっ、隣座ってもいいか？」

二人の美少女は――

両側から、あなたを挟み込むように座るのだ。

ベッドに腰かけると言うよりは、ベッドの上に乗っている二人。

すらっと長いのに、ムチムチな太腿が露出しているのは――

彼女達がスカートをはき、わざと短く詰めて履いているからだ。

二人の美少女は、あなたに顔を近づけている。

武闘派の美桜の切れ長な瞳と、おっとりした桃華の目尻がとろんと落ちた瞳。二人の少女は双子であるが二卵性なので、違う部分が沢山ある。乳房のサイズは共通して大きいのに――美桜はつんと張った生意気な釣り鐘型のロケットおっぱいで、桃華はふんわりとやわらかく、まるっこいお椀型のお

っぱい。明日になれば、彼女達の妻になる雄が知ることになるのだろうか——少なくとも、今日の時点ではあなたしか知らない事柄であり——

彼女達は——

”……ちゅっ♡

”……あむっ♡

と——

あなたの頬に、接吻をしてくるのだ。

慌てて逃げだそうとするのだが——

いつの間にか、あなたの両足に彼女達の太腿が絡みついてくる。

長く着古して、毛玉も浮いてるパジャマ越しに——彼女達の生の太腿のすべすべが感じ取れるのだ。

あなたは逃げることも出来ず、二人から降らされるキスの雨に、困惑しながらも野ざらしになる他になく——

「……私達の口から言うのは、その、なんとも恥ずかしいが……」

「誰も、教えてくれなかったんだから——、しょうがないよね——」

二人の少女は——

「旦那様……♡」

「ご主人様……♡」

あなたの耳元で——

”ぼそりっ♡♡”

と、蠱惑的な音色を響かせるのだ。

「……桃華とも相談したんだ……っ♡

妻となるなら……婿を迎えるなら、誰がいいか……とな……っ♡

「そしてー……弟くんがいいなーって話になったんだよー……っ♡

男の子はー……二人まで、お嫁さん作れるし」

「村長に許可を取りにいったら、驚かれたが……春野の家には、ほんとに感謝しかないな……」

「春野家の跡継ぎ様のお嫁さんはー……村でいっちばくんエロい女二匹で……丁度いいもんねー」

二人が囁く言葉は——

あなたの理解を、遥かに超越した代物。

何度も何度も頬にキスをされるだけで——

男の理性というのは、グズグズになるまで蕩かされていくのだ。

それなのに、急に「あなたと二人ともお嫁さんに娶るんだよ」と言われても、理解が出来ない。出来るはずもない。確かに——確かに、二人が誰の妻になるのか、聞きたくも無いと思つて耳を塞いでいたのはあなただが——それにしたつて、二人がああなたの妻に——

考えれば考えるほど——

「ああ、これは夢の中で、目覚めたら朝になっていて、二人の花嫁姿を祝福しなければならぬ」  
以外の答えが浮かばないのだが——



される”ほっぺチュー”でドロドロになっている。

「……ふ、拭いた方がいいよな……?」

美桜はあなたに尋ねたが、答えは決まっていたのだろう。

パジャマとパンツを同時に脱がせて――

「う……うわぁ……っ♡こ、これが……出した後の……ち、ちんちん……?」

あなたの逸物を”むんずっ♡”と掴む。

桃華の優しい手付きとは違い、乱暴なそれにあなたの身体は”びくっ!”と激しく弾む。美桜も慌てて狼狽するが――「竹刀握るときみたいな力で……」と桃華に言われると、すぐに理解したのだろう。優しくふんわりと、しかし、確固たる力強さであなたの肉棒を掴み――

「んっ……痛かったら、言えよ……?」

あなたの亀頭を、ウェットティッシュで拭いていくのだ。

半固形状の、ゼリーのようにぷるぷるとしている精液を、彼女は優しく拭っていく。あなたの身体は、激しすぎる快楽に身悶えしている。射精直後の敏感な肉棒に、雄の矜持を理解していない美桜の手付きなのだ。だがそれは――

どこまで突き詰めても”快楽”によるものであり、あなたは桃華に助けを求めるのだが――  
「……お姉ちゃんとしては……弟くんのお嫁さんになれるの……嬉しいよ?」

彼女はその視線を「本当に自分なんかでいいのか?」という疑問に、捉えたらしい。

直後――

あなたの腹の奥で、マグマが湧き上がってくる。

二人の美少女にプライベートを侵食されて、隙を見計らわなければオナニーも出来なかったのだから溜まっていた古い精液が掻き出されたことにより、あなたの精巣が激しく活動をしているのだろう。

やがて、美桜はあなたの下半身を綺麗にして、パンツとズボンを通りに戻して――

「よししょ……っ♪」

あなたの手を引っ張り、立ち上がらせる。

「お姉ちゃん達な……？女の子だから、相応の準備が必要なんだ……っ♡」

「んく……っ、夜十時になったら……一階の和室、来て？」

二人の少女はあなたに告げて――

”す……っ♡♡”

と、ブラウスをめくり――

自身の腹部を、さらけ出す。

剣道一筋で引き締まり、うっすら腹筋が割れている美桜の腹部と――

運動が嫌いであり、つまめる程度の柔らかな腹肉の桃華の腹部。

双子であっても違いがある、二人の腹部に、あなたは手を伸ばす。

「そこにな……お姉ちゃん達の子宮があるんだぞ……っ♡」

「ここをね……弟くんのものにするんだよー」

二人が囁いた言葉に――



あなたの腹の奥で、マグマが限界を迎える。

頭の中でおぼろげに思い出すのは、保健体育の授業で習った妊娠のメカニズム。精子が受精して着床してくというそれが、現実のものとして存在することに、あなたは目を丸くするばかり。二人の少女の腹部から感じられる、小刻みな震動は、彼女達が生きている証拠。制服をめくって、子宮を腹の上から撫でさせてもらえるというそれが——どういう意味であるのかを、まさか理解出来ないはずもなく——あなたはひたすらに困惑しながら、それでも、二人が去った後でベッドで正座して、夜の十時が来るのを待ちわびた。

## 二章

夜の十時になり、あなたは一階に降りていく。

家の中には、電気が付いていないいけないことなど何もなければなのに、どこか、電気を点けることが躊躇われて——あなたは、真つ暗な廊下を進んでいくのだ。

両親は共に、いつの間にか出かけていたらしい。

心臓はバクバクと弾んでいる。幼かった頃に「いい加減一人で寝ないとダメだから」と母親に躰けられて——それでも夜の闇が怖くて、姉の部屋に逃げ込んだことを思い出すのだ。

あのときの暗い廊下は、親には内緒だったが——

今は、両親が同意の上であるのだ。

考えれば考えるほど——あなたの思考は、ぐるぐると巡っていく。

春野美桜と春野桃華を妻として娶れる男の興奮に、殺意にも似た嫉妬を抱いていたのだが——

それを二人同時に、しかも自分がというのは——

あまりにも、現実味がないのだ。

頬を抓っても少しも痛くないのは、これが夢だからか——それとも、脳内物質のアドレナリンが過剰に分泌されているからなのか。判断は付かない。ギシギシと軋む階段を下っていく間も、ふわふわとした足取りは、やはり夢のように思えるのだが——

ノックをして、和室のふすまを開けた瞬間に——

「ん……っ♡待ってたぞ……っ♡」

「んふふー……ようこそーっ♪」

二人の美少女が——

白無垢を着て、あなたに三つ指を付いているのだ。

いつもの「美桜ねえ」と「桃華ねえ」とはまるで違い——

そこにいるのが、別人であるような錯覚に陥る。

ああ、自分はこれを——

他の男に嫁ぐ二人の姿を、覚悟していたというのに——

「ご主人様……私、春野美桜と……」

「旦那様……私、春野桃華は……」

「あなた様に、永遠の愛を誓います……っ♡」

二人の少女は、声をハモらせながら——

あなたに頭を下げて、宣言をするのだ。

神聖で厳かで、決して踏み荒らすことが許されない雰囲気も——普段の生真面目な美桜と、計算高

い桃華を前にすれば、あなたに漂うのは興奮ばかり。「弟くんには人権はないよ？」とでも言いたげ

に、たっぷりとあなたをからかう美少女二人が——

その身をあなたに捧げると、白無垢を着て、頭を下げるのだ。

そうして——

あなたが有利だったのは、そこまでの話だ。

”ぢゆるるるる〜っ♡はむっ♡むちゅっ♡ちゅぶっ♡れろれろ……っ♡”

”ちゅっ♡ちゅっ♡あむっ♡むちゅっ♡ちゅぶっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡”

ようやく、話は冒頭に戻り――

「ふふ……っ♪ああ、なんて可愛らしいんだ……っ♡……いやはや、違うな……っ♡かつこいい、だな♡私達の旦那様はともかつこよく……んっ♡ほっぺにチューされても……トロトロになつたりしないものなあ……っ♡」

「ちゅー……お姉ちゃんとしゅー……ほっぺチューされるの、好きだよねえ……♡いっぱいチューしよー？ねー？どっちのお姉ちゃんが好きー？……かわいいおとーとくん……っ♡チューされるの、だ〜いすぎなご主人様はー……どちらが好きー？」

壁際に追い込まれて、あなたは、これ以上下がることは出来ない。

神聖な白無垢を着た二人の少女は――今、それを半脱ぎにしている。露出した乳房が、あなたの視界に映る。二人の乳房は何度も、幾度となく、風呂場で見てきたのだが――

そのときの興奮とは、意味合いがまるで違うのだ。

あなたは風呂場では、彼女達にされるがまま。美桜と桃華はあなたの肢体を自由に洗うが、あなたは彼女達の身体に触れない。「貴様の身体を洗ったんだから」「私達の身体も、洗ってよねー」と二人に言われても、あなたは目を逸らしながら、ボディタオルで擦るのが精一杯であり――

「触っていいんだぞ……っ♪ほらほら、旦那様……っ♡」

「桃華お姉ちゃんと美桜ねえのおっぱいはー……ご主人様のものだよー」

二匹の雌猫は――

”ぷにっ♡たぷっ♡”

と、自身の乳房を指でつんつんと突くのだ。

あなたにとつてそれは――

彼女達が、他の男に捧げると思っていたものだ。

美桜も桃華も、弟の自分とは違う雄に嫁いで、妻として淫らに喘ぐのだと思っていた。村の汚いエロ親父や、エロガキどもに――、二人の身体を陵辱される光景。自分に待ち受けている全てのバッドエンドは、回避するために行動しようとしても――、十二歳の自分では何が出来るはずもないと知っており、諦める覚悟をする為だけに時間を使っていたのだが――

「……貴様が触らないなら……」

「お姉ちゃん達のおっぱい……誰かに取られちゃうよー……?」

二人の少女は、あなたの耳元で囁き――

”むっぎゅっ♡♡”

「わ……っ♡」

「ひゃん……っ♡」

思考よりも先に、反射的に手が伸びていた。

あなたの手が――、美桜と桃華の乳房を鷲掴みにする。

掌に広がるのは、極上の心地だ。

雄として生まれてきた意味が一瞬で理解できるような——、二人の大きく豊満な果実。

美桜の乳房には指を跳ね返すような張りがあり——桃華の乳房には、指が根元まで埋まる柔らかさがある。いつもは、風呂場で一緒に湯船に入ったたり。布団の中で抱き枕にされるときに乳房の感触を味わうだけ。あなたは拒む振りをするが、彼女達のそれに、本気で抵抗をするはずもない。背中や太腿に触れる乳房の柔らかな感触は、男として生まれてきた以上は絶対に逆らえないものであったのだが——

それらは飽くまで、押しつけられるラッキースケベなのだ。

だが、今は違う。

あなたの両手は、自らの意志で二人の乳房を鷲掴みにしているのだ。

柔らかな感触が指一杯に広がる。掌をグーパーと開閉させる、ストレッチのような動きに合わせて、あなたは幸せを感じるのだ。「ん……っ♡」「あ……っ♡」と、美桜と桃華は嬌声を響かせながら、あなたをじいっと見つめている。胸を揉まれて、そこに抱く感情が「興奮」ではなく「慈愛」であるのは、あなたにとって溜まらなく興奮するものだ。

「なあ……どちらが好きなんだ？私と桃華……」

「美桜ねえよりも……桃華ねえだよねー？」

”ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅぶっ♡はむっ♡”

二人の少女の乳房を揉みながら、どちらが上かを尋ねられる状況。

どちらかが不在の状況で、片方に尋ねられてもあなたは常に言葉を濁していた。

「お姉ちゃん二人は、どちらも自分にとって同じだけ大事」という返答であり——それでも執拗に尋ねられれば「そういうこと聞かれると、嫌いになる」と答えれば論破が出来ていたのだ。

いや——正確には、二人の掌の上で踊らされていたのかもしれないのだが——

とにかく、今のあなたは二人の言葉に返答が出来ないのだ。

春野美桜と、春野桃華の二人の極上の美少女に順番を聞かれて——返答が出来なくせに、鼻息を荒げて、二人の乳房を鷲掴みにしている男。これをしているのが自分ではなく、あなたが見物者の場面であれば、殺意にも近い感情を抱くだろう。二人のぷつくらと膨らみ、硬く隆起した乳首をこねこねと指の腹で愛撫しながら——二匹のエロ雌が、腰を弾ませる姿に優越感を抱いている雄。世界の全てを手に入れたようなものであるのに、それでも、その妄想上の彼は涙目になることで、二人への返答を煙に巻こうとしているのだ。

その優柔不断な態度は、他ならぬ自分自身でなければ、殺意すら抱きそうなものだが——

「……うんっ？ああ、違うぞっ♡無理やり……んっ♡私と桃華の、どちらが上かと優劣を付けるんじやなくて……」

「……私とー、美桜ねえー……どっちから先に食べるか、聞いただけなんだけどー？」

二人の少女は——

”どさっ♡♡”と、あなたを押し倒す。

せっかく布団を敷いたのに、あなたは壁際に追い詰められて、畳に背を付けるのだ。

着用していたパジャマはボタンで止める代物であり——  
いとも容易く、あなたは彼女達に服を脱がされる。

パンツ一枚にさせられても、美桜と桃華の爆乳を揉みしただける男に——  
まさか、ほんの欠片も不平不満が存在するはずもない。

「……んふふっ♡ブリーフは……かわいいなあ……っ♡」

「白のブリーフ……っ♡恥ずかしいのー？なんでー？……かわいいのにっ♡」

あなたの下着は、肌に密着している白のブリーフだ。

周囲の男子は皆、トランクスやボクサーパンツであるのだが——あなたは「親が買ってくるのがそれだから」で、未だにブリーフを履く他にないのだ。周囲の皆と違うことが、あなたには恥ずかしくても——しかし、「たかが下着」が恥ずかしいから買い換えるお金が欲しい、と主張することは、もつと恥ずかしくあり——

”カリカリカリカリ……っ♡くにくにっ♡ふにふにっ♡もみっ♡カリカリ……っ♡♡”

「……あははっ♡なんだ、その素っ頓狂な反応は……っ♡男子として、情けないぞ？」

「ちんちんカリカリされるのー、気持ちいいの？……んふふっ♡お耳も舐めてあげるね……れろお……っ♡」

「んっ♡ちゅっ♡……どうした？耳、舐められるの……んちゅっ♡れろお……っ♡苦手か？」

「苦手ならー、やめるけどお……っ♡んちゅっ♡はぶっ♡好きならー、やめたげないよ？」

あなたは——

”ビグビグっ♡♡”と全身を身悶えさせることになる。

二人の美女が、あなたの白ブリーフ越しの膨らみをカリカリと爪でひっかいて——更には、あなたの耳に舌を這わせてくるのだ。あなたが知っている性知識とは違う——意味のわからない快楽の津波。肉棒をシゴいているわけではないのに、お漏らしのように射精してしまいそうな、二人のちんカリ&耳舐めに骨抜きにされてしまう。

「どっちが好きか……と、聞かれるのが嫌か？……なら、こう聞けばいいだろう？

……私と桃華、どちらで筆下ろしがしたい？」

「お姉ちゃんのおまんこねー、多分、気持ちいいよー？……したことはないけどお……♡クラスの男子とかねー、周りのおじさん達があー、桃華のまんこは……ふわっふわのとろとろ……♡男の子のおちんちんをく、柔らかく、ふにふに♡いっっぱい包み込んでくれるって……噂してるし……♡」

「ふふっ♪私の膣圧も、桃華に負ける気はないぞ？……右に同じく、経験なんでもものはないが、ほらっ、触ってみろ？……剣道で鍛えたこの腹筋で、締め付けてやるからな……♡ギチギチのキツキツだぞ……♡一度にゅっぷんしたらあ♡ぜっつたいに雄を逃がさない孕みまんこ……♡……ふふっ♡私も噂だがな……♡」

「ねえー、ご主人様……♡」

「貴様は、どっちで童貞を捨てるんだ？」

美桜と桃華は囁きながら——

何度も何度も、あなたの頬にキスの雨を降らせるのだ。

あなたの理性を蕩かせることだけを目的にしているような——、二人の誘惑。

つい先ほどまでは、心のどこかにヘタレが存在していたのだ。

二人の美少女はこの村の因習を良しとせず、故に、あなたに屈した振りをしたただけだ——と。

二人のそれは、あなたとの偽装結婚により生娘のまま村を脱出するための方便であり——

だからあなたは、どれだけ興奮をしても二人に手を出してはいけないのだ——と——

そんなヘタレた心を、二人は情熱的な「ほっぺにチュー」で蕩かしていくのだ。

生まれたばかりの赤ちゃんが、周囲に気を使わなかったり、自分の感情を我慢しないと一緒だ。

腹が減ったら泣き叫び、痛かったら泣き喚き、うんちが漏れても泣きじゃくる赤子のように——あなた

の心は、今、赤ちゃんよりも未熟な状態になっている。たっぷりの母性を捧げられた状況では、赤

ちゃんにならない方が無礼であり——

あなたは下半身からトロトロと、甘いお漏らしをしそうになりながら——

「……んっ？決めたか？」

「恨みっこなしだよー」

美桜と桃華の顔を見つめる。

どちらも——

あなたにとって、たまらなく大好きな姉なのだ。

剣道一筋で、強く誇らしく、春野家の長姉にして最大戦力でもある春野美桜はあなたにとって憧れ

の存在であり——茶道や華道で穏和な雰囲気醸し出しながらも、賢く、定期テストでも一番を取る

春野桃華はあなたにとって癒やしの存在。二人の少女の肢体を懸想して、自慰行為に耽ったことは幾度となくあるのだが――

それは、突き詰めると「その日の気分」に他ならないのだ。

激しく興奮をしているときは、美桜を組み伏せることを妄想して――だらしないう性欲のときは、桃華に優しくリードされることを懸想する。時には、二人の少女があなたにソーププレイをしてくれて――時には、二人の少女が他の男に汚される姿を妄想する。美桜も桃華もどちらも極上の美少女であり、純愛であれ寝取られであれ、雄を興奮させることには違いがないのだが――

トロンと目尻を落として、荒い呼吸で、ロケットおっぱいとお腕型おっぱいを晒している二人の美少女を――これから、二人とも貪るに際して――

その順番というのは、たまらなく大事なのだ。

あなたがぼやぼやと、優柔不断な無様な雄を晒している間にも――”カリカリカリ……っ♡”と二人の美少女は、あなたの股間にちんカリをしてくる。反対側の手では、あなたの乳首を優しく愛撫してくるのだ。まだ性感帯としては芽生えていないが、それでも、二人のしなやかな指に撫でられると、くすぐったいような快樂が広がりあなたは悶えて――早く、一刻も早く決断をしなければいけないに――

春野美桜も、春野桃華も――

あなたはどちらも、同じだけ大好きなのだ。

どちらが上で、どちらが下であるかなんて考えたこともない二人の美少女。あなたは優柔不断に決

断を下せない。美桜と桃華にとって、その態度はあなたを幻滅せしめる代物なのだ。二人があなたを婿として認める以上は、彼女達の極上に相応しい雄にならなければいけないのに――

どちらも選べずに、やがて餓死を待つほかにない、愚鈍な口バに惚れてもらえるはずもなく――

「――わっ！？な、何故泣くんた貴様！？」

「あー……選べなかった？よしよし……もー、泣かなくていいのに……っ♡」

あなたは、ボロボロと涙を流してしまうのだ。

自分の不甲斐なさへの涙は、本来ならば彼女達を幻滅させる代物なのだ――「ううむ……っ♡泣かなくてもいいのに……っ♡」「お姉ちゃん達は……っ♡ご主人様の、そういう優しいところ好きだよー？」と二人の少女は、あなたの涙にまで好感を抱くよう――

”ぺろっ♡♡”と、両目から滴る雫を舌で拭ってくれるのだ。

先ほどまでの淫靡で、妖艶な雰囲気とは異なり――

「だが……どちらか選ばなければ、朝が来るぞ？」

「ねー……朝になっても処女だったら……寝取られちゃうぞーっ♡」

いたずらっぽく、しかし、慈愛に満ちた瞳であなたを見つめている。

そして――

二人は、あなたの顔の前に握りこぶしを作るのだ。

「……迷ったら、春野家ではいつもそうだろう？」

「ご主人様に勝った方が最初でー、あいこはやりなおしー」

二人の言葉に、あなたは反射的に意味を理解して――

「じゃーんけん♡」

「ぼんっ♡」

と――

促されるがままに”パー”を出した。

「……ふっ♪どうやら私の勝ちのようだな……桃華……っ♪」

「あーあー……ご主人様の童貞はあー、美桜ねえのものかー♡」

美桜は”チョコキ”を出して、桃華は”グー”を出している。

たった一回の、不意打ち気味のじゃんけんで――

「それじゃあ……私からさせてもらうぞ？異論はないな？」

あなたは、童貞を捨てる順番を決めさせられたのだ。

あなたの意志が介在すれば、二人で奉仕をする際に要らぬ軋轢が生じるかも知れないと――、美桜と桃華は、自身がエロ猿どもに狙われ続けながらも、必死に守り続けた十八年物の処女膜を、じゃんけん勝負の景品に捧げているのだ。雄としてはこれ以上ないほどの優越感であり――

”ぐいっ♡”

「ほら……っ♪こんな端っこじゃなくて……っ♡お布団に行くぞ……っ♡」

あなたは――

美桜に、いとも容易く持ち上げられるのだ。

背中と膝裏に腕を回されて、体重を支えられるそれは——いわゆる”お姫様抱っこ”というものだ。男が女に——ならば普通のことであっても、女が男にであれば格好が付かない。だが——あなたの細腕では、女性でも長身の美桜を持ち上げるのはギリギリだろう。

それなのに美桜は”いとも容易く”であなたの身体を持ち上げて——

”ぼすっ♡”と、優しく布団に置くのだ。

仰向けになり、ブリーフ一枚で天井を見上げているあなたと——

半脱ぎの白無垢で、真っ白で大きく豊満な乳房を晒して、あなたを見下ろしている美桜。

どちらが捕食者で、どちらが被捕食者であるかは一目でわかるだろう。あなたは、逃げることも出ずに、ただ息を飲み込むだけ。それが美桜にとっては「我慢できない」という催促に感じたのだから——

「ふふ……っ♪お姉ちゃんに任せておけ……っ♡

気持ち良くしてやるからな……っ」

美桜は——

あなたに、徐々に顔を近づけていく。

布団で仰向けになったあなたが、その持つ意味を理解していないはずもない。

彼女が十八年間守り続けて——あなたもまた、十二年間守り続けてきた代物。二人の少女はスキンスリップの一環で、あなたの頬やうなじにキスすることはあっても「虫歯が移ったら大変だから」と、唇のキスは禁止されていたので——

だからこれは、正真正銘の——

”れろお……っ♡ぬるっ♡むちゅ……っ♡”

美桜は——

あなたの唇に、ファーストキスを捧げてくるのだ。

心臓が、バクンツと弾む。

春野美桜は女子剣道部の主将でもあり、この村の因習に逆らわずとも、抗おうとしている少女。心を強く気高く持てば、身体が陵辱されても敗北ではないと主張をしており——そんな彼女は、村の中にもファンの方が多いのだ。勿論それは、平凡な憧れではないだろう。美桜とつがいになれば、彼女の人権の全ては雄に譲渡されるのだ。気高く強い、乳のデカイ剣道少女。そんな美桜を、性欲の赴くがままに陵辱したいと思うのは当然の反応であり——だから、彼らは美桜に媚びを売るので。「どうせ嫁ぐことは避けられないのだから、せめて、男の中でも一番マシな奴に」という思惑で、彼女が妥協したその日の夜に、豹変する気満々の下衆な男達。「性欲を剥き出しにして、女はちんぽ入れる為の穴っぽこ」だと主張している奴の方が、まともに見える異常性欲者達から常日頃狙われているのが、春野美桜であり——

”はむっ……っ♡むちゅっ♡れるれる……っ♡れろお……っ♡”

「んっ♡ちゅっ……っ♡口、あけろ……っ♡べろ……っ♡はいらなだろ……っ♡」

そんな彼女が——

あなたに覆い被さって、唇を捧げてくるのだ。

ぷにぷにで柔らかな唇は、一切の乾燥とは無縁の代物。彼女達は自身が使うリップクリームを、肌身離さず持つていなくてはならず——、校内や帰り道に一瞬でも目を離せば、それを使わずに即座にゴミ箱に入れなくてはいけないのだ。「美桜と桃華の使うリップクリームを、ちんちんの亀頭に塗りたい」というそれは——誰にも見られていない場所で、これ見よがしに彼女達の私物が置かれていれば、男ならば過ちを犯すに値する価値であり——

春野美桜と春野桃華の唇は、その警戒に値するぷにやわで極上——  
世界で最も、グラム単価の高い媚肉なわけであり——

”ちゅっ♡れろっ♡……っつっつ……っ♡んっ♡ん……っ♡”

そんな唇から溢れる唾液を流し込まれて——

あなたは、美桜に捕食されているのだ。

白無垢からはみ出た、美桜の長すぎる脚があなたの太腿に絡みついてくる。産毛の生えたあなたの脚に、すべすべの媚肉はあまりにも官能的な触り心地。幼子の頃に、手放さずに握っていた安心毛布を遥かに超えたすべすべに——あなたは、ただのそれだけで射精してしまいそうになり——

美桜の両手は、あなたと恋人繋ぎをしているのだ。

互いの五指を絡め合わせて、密着させている状況で——舌肉の根元まで絡ませ合う、濃厚なディープキスを行っているのだ。あなたがっん、っんと臆病に舌先で突けば、その十倍の激しい動きで、あなたの口腔を陵辱してくるのが美桜だ。互いに夢中になりながら唇を貪り合って、やがて——

”ぷはあ……っ♡”と、どちらかともなく唇を離す。

互いの舌の間に、唾液で出来た橋が一本、つつっ♡と架かる。

滅多に冷静を崩すことはなく、常に背筋をピンと伸ばしている美桜。彼女は同性からの人気もあり、一部の女は「どうにか同性婚をして、美桜の人権を奪えないか」なぞと画策をしているという噂も聞いたことがある。仮に、自分が弟でなかったとしても——あなたは、美桜に惚れたであろうことに疑いを持たない。大勢の人間を虜にする、気高き狼のような姿であり——

そんな彼女が——

「……お姉ちゃんのチュー……美味しかったか……？」

あなたに覆い被さって、ハートマークが飛び交うような、雌のフェロモンを放出しているのだ。

下半身をぐりぐりと、あなたの身体に擦りつけている美桜。股間に肉棒を生やして産まれたあなたは、当然だが美桜とは骨格が違う。「今はまだ私の方が強く、背も高いが……いずれ、貴様に追い抜かれる日が来るんだろうな」というのは、美桜と入浴して彼女に背中を洗われるときの口癖のようなものであり——

あなたの雄の骨格に、美桜は興奮をしているのだ。

「……なあ？はじめては、どうする？」

「……自分ですると……お姉ちゃんにしてみらうの……っ♡」

美桜はあなたに囁いてから——

白無垢越しの自身の秘部を、くちゅくちゅとブリーフ越しに擦りつけてくる。

そこには一切の下着が存在していないのだろう。共に入浴しても、二人の少女は流星にそこを隠す

ように股を閉じるし——あなたも、ジロジロと見てはならぬと知っていた。だから、記憶にあるのは曇り止めがついた鏡越しの陰毛だけであつたのだが——

「……そうだよっ♡」

それが……美桜ねえのおまんこだよ……っ♡」

あなたの耳元で——

桃華が、囁いてくるのだ。

順番を待っている彼女は、手持ち無沙汰にあなた達を眺めていた。美桜は退屈を嫌うが、桃華は気の長い少女であり、本来であれば正座のままことが終わるのを待てるはずだつたのだが——

「こうんなえっちなお顔のご主人様……っ♡見せられてー、我慢とか難しいよ……?」

桃華は、あなたの頬に何度もキスを繰り返してくる。

さながら、添い寝のような姿勢であり——

あなたの視界には、自身の右乳により押し潰される左乳の光景が広がるのだ。

何とも官能的なそれに、慌てて採みしだこうとしても——両手は、美桜と恋人繋ぎだ。

だが——

「ねー……美桜ねえ、片手だけちようだい?」

「ん……っ♡全く、しょうがないな……っ♡」

桃華の提案に、美桜は右手を離して——

「んふふー……ご主人様のお手手だーっ♡」

即座に、桃華があなたと恋人繋ぎをするのだ。

「このお手手で……いっつもシコシコしてたんだよねー……っ♡……バレてないと思った？……おトイレでシコシコした後ねー、匂いすごいんだよー？……んふふー、怒ってないけど……っ♡でも……あれ嗅がされてー、ムラムラさせられた責任は取ってもらわないとなー……っ♡」

桃華は――

”べつろお〜っ♡”と、あなたの掌に舌を這わせてくる。

普段から自慰行為に耽っているそれは――

あなたの身体で最も、自身の肉棒を知っている場所だ。

陰茎を何度も何度もシゴき上げて、雄の精液が染みこんだ掌に――桃華は自らの舌を這わせていく。彼女が弁当を食している瞬間を盗撮した動画が――男達のシコネタになるほどの、極上の美少女なのだ。近寄りがたい雰囲気を漂わせて、どれだけ陵辱しても、決して心が折れることのなさそうな春野桃華という極上の雌は――背筋をピンと伸ばして、ミートボールを半分に割って小さな口に運ぶ姿だけで、雄にはたまらなく劣情を催させるというのに――

「じゅるるるる……っ♡はむっ♡むちゅっ♡

……んふふーっ♡ご主人様のおお手手……美味しいねーっ♡」

「んっ……そんなに、美味しいのか？……左手でも……んちゅっ♡

れろれろ……っ♡んん……っ♡なるほど……これは……癖になるな……っ♡」

二人の少女は――

あなたの掌を、ベロベロと舐めしゃぶってくるのだ。

彼女達にとって、あなたと同一歳の男子の利き手は、握手をするだけでも表情が歪む代物だ。それなのに——、二人の少女は、あなたの指の谷間にまで舌を這わせてくるのだ。極上の美少女二人による奉仕に、あなたの背筋はゾクゾクと痺れるような快樂を抱く。

やがて、桃華は先に舐めるのをやめて——

あなたの腕を掴み、下半身へと引っ張り込んで——

ぬ……………ぷぷぷぷ……………っ♡”

と——

あなたの人差し指を、ぬめぬめした何かに突っ込むのだ。

最初はそれが、何かわからなかった。

つい先ほどまで、あなたの指を咥えていた口の中を彷彿とさせるのだが——今、あなたの目の前に桃華の空つぼの口があるのだ。下半身に口などあるはずもないのに——

と、そこまで考えて、鈍感なあなたも気が付き——

「んふふー……………っ♡シコ猿男子の、せーえき染みこんだお手で……………んっ♡

触られたらー……………赤ちゃん出来ちゃうかもねー……………っ♡」

あなたの右手の人差し指は——

今、春野桃華の膺内に”ぬぶっ♡”と埋められているのだ。

人差し指の第一関節までの、浅いところしか入っていないのは——彼女が、性経験のない生娘だか

ら、なのだろう。処女膜を破ってもらうのは、指ではなく肉棒がいいと懇願をするような態度に——あなたは、指の先端を曲げて反応する。彼女の膣の、一番浅い部分ではきつと、セックスの醍醐味の億分の一もわからないのだが——それでも、今まであなたが経験したことのない”ぬめぬめ”に指先は夢中になり——

「む〜……っ♡貴様のはじめては……私だろ？」

あなたの上に跨がりながら、美桜は不満げに頬を膨らませてくるのだ。

すりすり、下半身をあなたの下着越しに擦りつけてくる美桜。やがて、あなたに尻を向けて——彼女はシックスナインの体位を取る。美桜の下半身の膣肉は——あなたがお風呂場で、見てはならないと視線を逸らしていた代物だ。艶やかな桃色の秘裂は慎ましく、俗に言う「ビラビラ」もほとんど伸びていない。あなたは健全な男の子であり、親からスマートフォンを与えられているのだ。無修正のまんこを見たことは当然あり、その度に「うわ……グッロ……」と思っていたのだが——

「ん……っ？どうした？お姉ちゃんの……ううんっ♡

お嫁さんのおまんこに……夢中なのか……？」

美桜の秘部は、どす黒く染まった淫売のそれとはまるで違うのだ。

彼女は、あなたの下着を脱がせていく。肌に密着したブリーフの中身は——我慢汁で、ドロドロのぐちよぐちよに汚れている。「んっ……♡酷い臭いだな……♡」と美桜は、あなたの肉棒に鼻先を寄せて”すん♡すんっ♡”と臭いを嗅ぐ。あなたが発するべき言い訳は幾らでもあれど——彼女のような極上の美少女に、ちんちんを嗅がれていて——しかも、目の前には春野美桜の慎ましいおまんこが

あるのだ。あの剣道一筋の、強く、武士のような雰囲気を保っている彼女が——子供まんこであることを知っているのは、世界で、あなたと桃華だけなのだ。

優越感のままに、あなたは舌を伸ばして美桜のまんこを舐めようとするのだが——

「いやはや……桃華も待っていることだし、手っ取り早く済ませるとするか……っ♡」

「くるりっ♡」と美桜は、再度身体を反転させて——

「くちゅり……っ♡」と、あなたの亀頭を秘部に触れさせるのだ。

あなたは今、美桜にされるがままの状況だ。桃華は耳元で「よかったねー、童貞卒業出来るよー♡」と呑気に囁きながら、あなたの横顔を見つめている。「ご主人様が童貞捨てるどころ……ちゃん」と見といてあげるね……っ♡」と、耳元でふうっ♡と暖かい息を吹きかけて、あなたの下半身は「びぐっ♡」と弾み——

やがて——

”にゅ……っぶぶぶぶ……っ♡♡♡”

「んぐ……っ♡あっ♡はあ……んんん……っ♡おっ、ほう……っ♡これ……は……んんっ♡中々……くるしい、ものだな……っ♡だ……が……んぐ……っ♡はあ……

……入ったぞ……全部……なっ♡」

美桜は腰をぐぐっと落として——あなたの肉棒は先端に激しい抵抗を感じて——

聞こえるはずのない”ぶちぶちっ♡”という音まで響いてくる。

肉棒の根元まで、美桜は膣内に挿入して——



「す……すまない……っ♡覚悟は、してたんだが……んんっ♡何分、はじめてなもので……っ♡す、すこしだけ……♡こうさせてくれ……っ♡」

”むぎゅ……っ♡”と、あなたにしがみついてくるのだ。

六つ年上であり、あなたが小学校に入学したとき、彼女達は既に中学生だったのだ。あなたの身長はまだ伸びる（ことを期待している）のだが、現時点では美桜と桃華の方が上。あなたが、幼子だった頃から彼女達にしがみつくことは多々あっても——彼女達があなたにしがみつくのは、初めての経験であり——

「うっわあ〜っ♡贅沢だなー……♡  
……ねくえ？わかってる？

美桜ねえの処女膜をー……さくっつと破っっちゃう贅沢……っ♡  
あなたの耳元で——

桃華が、囁いてくるのだ。

「美桜ねえがー、男子から大人気なの知ってるでしょー？この村でー、生意気な女は人気なんだよー？わかるでしょー？男の子なんだから……っ♪凜として、ポニテ似合って、剣道一筋でつよつよな女の子がー……僕様の命令に従う、エッロ〜い人妻になるの……っ♡興奮するでしょー？

……だからね？美桜ねえとえっちするならあ、みんなすっごく焦らすんだよ？

ず〜と竹刀握ってきたお手下が、おちんちんを握るんだよ……っ♡このエッロ〜い雌の処女膜、簡単に破ったらつまらないからあ……っ♡春野家を……私を、弟を……守るために頑張ってきたブラ

イドぐつちやぐちやにしてえ……♡フェラチオも、パイズリも、素股も……♡とろとろでぬめぬめなあ♡おまんこ肉使わないプレイいゝっぱいしてえ……♡焦らして、焦らして……♡乳首硬くなつてえ、おまんこ濡れ濡れでえ……♡隙あらば抵抗しようとする生意気女……荒縄でギチギチに縛つてえ♡このエロエロおっぱい強調させてえ……♡身動き取れなくしてから……

にゅっぷゝゝ……♡

って……ちんぽぶち込むんだよ？

それなのにー、我が弟くんはー……♡美桜ねえのおまんこ、さくつと食べちゃうんだよ？次に順番が待ってるからー、簡単にパクって食べちゃうの……♡わかるー？どんだけ贅沢かー？美桜ねえのおまんこの初めてつてさー……そんな簡単に食べていいもんじゃねえぞー……エロガキ……♡

「む……♡桃華、それは……♡」

「えー？どうして？エロガキでしょ？ねー、エロガキ……♡お姉ちゃんに手マンしながらあ♡もう一人のお姉ちゃんとおちんぼしてるー、エロガキっ♡」

「き、貴様も貴様で、侮辱されたなら怒らねば……♡なっ♡……♡ん……♡♡興奮、するのか？罵倒されて？ううむ……♡なんとも難儀な性癖だな……♡」

「違うよねー……♡お姉ちゃんとおまんこしながらー、エロガキって呼ばれるのがいいんだもんねー……♡♡ほらほらっ♡エロガキー♡明日からどんな顔して学校行く気だー？周りの男子はー、みん

な童貞さんなのに……っ♥エロガキくんはあ♥年上JKの〜っ♥弟くんだ〜いすきなあ♥巨乳のお姉ちゃん二人がお嫁さんでえ♥毎日パコパコし放題だぞ〜っ♥

「むう……っ♥エ、エロガキ……っ♥エロガキ……っ♥これでいいのか……っ？……っ♥そうだぞ♥お姉ちゃんも……っ♥エロガキの、ち、ちんぽが……っ♥大好きだぞ……っ♥お姉ちゃんは……っ♥エロガキ様のお嫁さんになれて……っ♥果報者だ……っ♥」

二人の美少女が――

あなたの耳元で、愛情たっぷり悪口を放つのだ。

エロガキという響きは、本来ならば嫌な代物だ。

あなたにとってエロガキとは、クラスにいる、羞恥心も理性も何も存在しない男子生徒のことを指すのだ。村の因習を誇らしく思い、今の内からクラスメイトの女子を狙う気満々であり――女子生徒から反感を買うことも気にせず、自身の性欲の赴くがままに行動できる相手であり――

あなたは、嫌悪すると同時に――憧れてもいた。

街中で素っ裸になって歩くような、あなたの常識では絶対に出来ないそれも”底なしの開放感”が存在することは間違いないのだ。あなたはエロガキを否定しながらも、性欲がある以上は、心のどこかでそれになりたいと思っいて――

「んっ……っ♥このエロガキめ……っ♥そんなに……んふっ♥お姉ちゃんのおっぱいが好きか……っ？」

「おらー、エロガキー……っ♥剣道つよつよのー、美桜ねえまんこは気持ちいいか……っ♥」

二人の美少女にエロガキとして扱われる生ASMRに――

あなたは、身震いするほどの快楽が走るのだ。

二人の姉に頬をキスされて——美桜は、腰を振り出す。

「んっ♡あっ♡すまない、なっ♡私は……んふふっ♡まだ、生娘だから……っ♡慣れていない、と、思うが……っ♡遠慮無く、んんっ♡貴様の、好きないように動いて、いいからな……っ♡」

あなたに跨がりながら、腰をパンパンと打ち付けてくる美桜。

腹の上の腹筋が硬く、うっすらと割れていたところ——腹の内側までを鍛錬することは出来ないのだ。処女膜が破られた後の痛みがどんなものか、男の身であるあなたには想像することも出来ない。

だが——、十八年間、エロ親爺共から守り続けたそれが、容易く破られた後で——

あなたに跨がって腰を振り続ける愛情の大きさは、あなたにも理解が出来るのだ。

半脱ぎの白無垢で、腰を打ち付ける度に美桜の乳房が”ぷるんっ♡ふるっ♡”と揺れている。

中学生の時の彼女は、マラソンでは普通のブラジャーだと乳が揺れすぎるので——サラシをきつく巻き付けなければいけないのだと、あなたに語っていた。それでも、あなたの小学校の近くを通ったときに偶然見かけた美桜は、乳房を激しく揺らしていた。硬いものを柔らかくするのが困難のように、柔らかいものを硬くするのも難しいのだ。張りと弾力があり、掌を楽しませてくれる美桜の、つんと先つちよの尖ったロケットおっぱいが、今、あなたの真上でふるふると揺れて——

「ん……っ♡おっぱいを吸いたいのか……っ?」

美桜は——

あなたの顎を”すりすり♡”と撫でながら尋ねるのだ。

馬鹿にするな。自分は確かに頼りないが、美桜と桃華の旦那様になる身だ。二人を娶る強い雄の立場として、そんな甘えた真似が出来るはずもないだろう——愚弄するのもいい加減にしろと——

怒ることが出来たのなら、良かったのだが——

”む……にゅっ♡”

「ん……っ♡あっ♡はあ……っ♡んきゅっ♡んふう……っ♡

は、はげしいな……っ♡そ、そんなに吸っても……まだ、母乳は出ないぞ……っ♡？」

あなたは舌を伸ばしてしまい、それが返答で——

「わあ……美桜ねえのおっぱい……おいちいでちゅかー？」

美桜の乳首を吸いながら、彼女に騎乗位ゴムなし生えっちを堪能させてもらうのだ。

窮屈に上体を傾げながらも、彼女に騎乗位ゴムなし生えっちを堪能させてもらうのだ。「うわうわ……

♡美桜ねえが頑張ってきたの……♡パコパコの為に使うとか贅沢だね♡」と桃華は耳元で囁いてくる。美桜の腰使いは激しく、あなたにはそれが、処女を破ったばかりの女のものであるとは思えないのだが——

「んっ？……痛いぞ？すっごく、痛くて……っ♡クラクラするがな……っ♡

惚れた男の為であれば……んんっ♡痛いよ、くらい……っ♡

我慢出来るのが……っ♡春野美桜という女だからな……っ♡」

美桜は、乳首をチュパチュパと吸うあなたの頭を撫でながら——

にっこりと、優しい微笑みを浮かべるのだ。

雄としてのプライドを損なわせないように——処女膜を破られた自分よりも、童貞を捨てたばかりのあなたを氣遣ってくれる美桜の優しい笑み。「エロガキめー♥」と耳元で囁く桃華の言葉にも、今はプライドが削られることはない。

舌を激しく動かして、美桜の硬く隆起した乳首をコロコロと口の中で弄ぶ。あなたに出来ることはそれだけであると思い——激しく、夢中になって舐めしゃぶるのだ。「んっ♥あっ♥」と美桜は、小さく嬌声を響かせて——「ほらほらー、あの美桜ねえが……乳首吸われて感じてんぞー♥」と桃華は囁いてくる。今度の響きは、あなたの興奮をこんもりと積もらせるものであり——

「ふう、んっ♥……で、出るのか……っ?」

あなたの下半身は、限界を迎える。

元より、彼女達にほっぺにチューを繰り返されている時点で——

雄としては、限界を迎えていたのだ。

それに加えて、ちんカリや耳舐めのご奉仕も与えられていたのだ。

ここまで我慢を出来た自分自身を、褒めてやりたいほどであり——

「いいなー、お姉ちゃんのおっぱい、チューチューしながらあ……っ♥おまんこおむつにびゅーびゅーするのー?……うわうわー、エロガキーっ♥春野美桜のおまんこにー、膣内射精しちゃうのー?亀頭の先っちょ、ぐりぐりっしてながら……っ♥美桜ねえのおまんこの中で、ちんちんどくどくしちゃうのー?右手でシコシコしてー、どくどくするあれ……っ♥美桜ねえのおまんこの中でしていいと思ってるのかー♥こらー、エロガキー♥」

桃華はなおも囁きを続けながら、右腕を太腿で挟み込んでくる。

彼女の膣内に挿入された指は、既にぬるぬるのぬめぬめに汚されている。あなたに肉棒を挿入される前から、既にまんこをぐちよ濡れにしている女が生意気を囁いていると思うと、苛立ちはなく、むしろ興奮ばかりが湧き上がるのだ。そして、あなたのその態度が生意気だと思ったのだろう。桃華はあなたの耳に舌を這わせてくる。

反対側の耳は、美桜が顔を近づけて――

「……いいぞっ♡お姉ちゃんの膣内で、全部射精して……っ♡ほらっ♡どうだっ♡お姉ちゃんのおまんこ、んっ♡気持ちいいか？……ふふっ♡あまり、んっ♡自分の身体に、自信なかったんだぞ……っ♡この胸……っ♡先っぽ、ちよっと尖ってるから……っ♡桃華の、お腕型がよかったんだが……っ♡あはっ♡貴様が、んっ♡そんなに可愛いお顔で……夢中になって舐めるから……♡自信、ついちゃうぞ……馬鹿者……っ♡」

美桜の腰振りには、激しいラストスパートを迎える。

破瓜の痛みは、最早感じないのだろう。爪先立ちに腰を打ち付けるそれは”スパイダー騎乗位”と呼ばれる代物。前傾姿勢になり、あなたの口に乳首を含ませながら――両足の爪先十本で、自身の全体重を支えている状況。普通の女であれば困難もいとところだが――春野美桜という女は、毎日剣道場で汗を流しているのだ。あなたが産まれた日に、あなたを守るために道場に通い始めたという彼女が――その肉体でやるのが、授乳スパイダー騎乗位だという優越感。雄として産まれてきた意味を思い知らせてくれる優越感に、あなたはブルブルと震えて――「出すのー？出しちゃうのー？避妊具



ークを付けようとするのだが――

「あー……へたくそーっ♡」

キスすらも、今日が初めてのあなたが上手に出来る道理はないのだ。

何度も何度も唇を窄めて、吸い付いていくのだが――上手な内出血が付くことはない。だが、美桜にはその不器用さも愛おしかつたのだろう。「構わないさ……っ♡私の肌は、んっ♡薄いから……っ♡これで、十分嬉しいぞ……っ♡」と、自身の首の小さな痣を慈しむように撫でて――

「これは……お返しだっ♡」

”ぶっちゅっ……っ♡”

美桜はあなたの首筋に、吸い付いてくる。

下手くそなあなたとは違い――

捕食者である彼女は、いとも容易くあなたの首にキスマークを付けてくるのだ。

分厚く塗りたくった口紅で、唇の痕を付けるキスマークとは違い――痣のような内出血が残るキスマーク。同じクラスの男子ならばわからなくても、一部のませた女子には一目でバレバレだろう。

美桜は、そのキスマークに満足をして――

”ぬ……っぶぶぶぶ……っ♡”

と、腰を上げて肉棒を引き抜く。

挿入するときと同じ――いや、それ以上の締め付けをしているのは、彼女の肉体があなたを離したくないと、駄々をこねたからだろう。膣肉がめくれ上がりそうなほど、肉棒に密着してきて――

やがて”ぐぼお……っ♡”と引き抜くと――

「んん……っ♡出てこないな……っ♡……奥に……入りすぎたのか……っ♡」

美桜の膣は、あなたの雄の形にぐっぼりと広がっているのだ。

つい先ほどまでは処女だった膣肉が――自分の形を覚えていた光景。しかも美桜は、膣奥にへばりついたそれを掻き出す為に、自らの指を挿入するのだ。道場で正座をしている瞬間は、神聖的な雰囲気醸し出している美少女が――恥も外聞も忘れて、膣の奥に指を埋めてぐぼぐぼとかき混ぜている姿。つい先ほどまで童貞だったあなたには、あまりにも刺激が強すぎる光景であるのだが――

「ん……っ♡出てきたな……っ♡」

やがて、美桜の膣奥から――

”どろお……っ♡”と、精液があふれ出してくるのだ。

白濁とした精液には、一筋の赤色が混ざっている。

それが、美桜の破瓜であることには間違いない。

彼女の名を彷彿とさせる、桜色であり――

「どうした？……貴様が種付けした証拠だろ？」

美桜は、ニヤニヤと笑みを浮かべてあなたを見下してくるのだ。

あなたが見やすいように、膣を広げて――わざとがに股をしている彼女。グツグツと煮え滾った理性が蒸発して、あなたはふらふらとおびき寄せられるのだが――

「……次はー、こっちのお姉ちゃんだぞー♡」

「……ちっ」

桃華が——”ぬっ♥”と、あなたと美桜の間に割り込んでくるのだ。

彼女も美桜と同様に、自身の膣を割り広げている。

当然ではあるが、未だ挿入をしておらず——

桃華の秘部は、彼女の名前通りに艶やかな桃色をしている。

人体の内臓を彷彿とさせる、桃華の膣内。

膣の奥底までさらけ出すのだが、それが処女膜であるのかどうか確信は持てない。

「ほらほら……っ♥お姉ちゃんのおまんこ、どうかな……っ♥」

桃華の声色は、抑揚がなく平坦とした代物だが——

それでも、微かに震えが混じっているのはわかる。

雌としての極上は、美桜も桃華も同様に最上級であるのだが——、毎日剣道で汗を流している美桜に対して、桃華は華道や茶道と言ったインドアに傾倒しているのだ。太腿のむちむちは、美桜とは異なりたっぷりと媚肉がついた代物であり——

彼女の秘部からは、いい匂いがするのだ。

勿論、美桜のそれもいい匂いだ。剣道一筋で打ち込んでいる美桜の秘部に顔を埋めて、深呼吸をすれば、永遠の命が得られることはわかる。だが——美桜の、どこか甘酸っぱい臭いがあるのとは違い、桃華の膣からはフローラルな香りが漂ってくるのだ。

華道や茶道に精通している彼女は、普通の人間よりも敏感な嗅覚を持っている。

「夕食を食べられなくなると叱られるから、桃華には内緒だぞ」と、美桜と共に内緒で買い食いをした放課後は「お姉ちゃんにー、はあーって、息吐いてー？」と、さながら飲酒検査のように息を吹きかけさせられたこともある。「あんこの匂いがするなー、不思議だなー？」と、あなた達の悪事を把握する、警察犬のように優れた嗅覚。匂いの組み合わせを当てる、香道の組香にも精通をしているような彼女は――

「んー？……お姉ちゃんのおまんこ、くんくんしてー、えっちなワンちゃんだなー」

きつと、秘部に何かを塗り込んでいるのだろう。

香水であるのかどうか、あなたにはわからない。女の子のまんこの内側を見たのも、今日が初めてであるのだ。桃華は平然としながら、秘部に顔を埋めるあなたの頭を撫でている。

だから――

あなたも、激しく桃華の秘部を舐めてやる。

”じゅるるるっ♥べろっ♥べちよっ♥”と下品な水音が響くのだが――彼女の弱点がどこにあるのか、あなたはわからない。「セックスのときは、三回浅く突いて、一回深く突くのを繰り返す」程度であれば、ネットで身につけた性知識があるのだが――「どうすれば上手にクンニが出来るのか」なぞということは、自分の人生で必要になるまで数年はいると思っていたので、まるで知識は無く――

「ん〜……っ♥激しいなあ……っ♥おまんこ大好きすぎー……っ♥ほんとにわんこじゃん……っ♥」

「ふふ……っ♪桃華の膺が、そんなに美味しいのか？……お姉ちゃんのは、精液注がれちゃったけど……っ♥今度、クンニしてくれよ……っ♥」

あなたは熱心に、一心不乱にクンニを続けるのだ。

あなたの大好きな美桜や桃華が、どれだけご奉仕が下手くそでも——「情熱的に、一生懸命してくれている」とあらば、それだけで興奮はグツグツと煮えたぎるのだ。美桜と桃華は、あなたの妻となくことを望んでいる身。それならば、例え下手くそでも、自分の思いが伝わればいいと——

あなたは顎が外れそうなほどに、愛情たっぷりクンニを行うのだが——

「んきゅ……っ♥はあ……っ♥んんっ♥ふ、う……んんっ♥……気持ちいい、よ……っ♥」  
桃華は、それに夢中になってくれるのだ。

あなたの頭を撫でてくる桃華の手付きは、優しい。

上目遣いで彼女を見つめると——その表情が、桃華にはたまらなかつたのだろう。

彼女はそれを、永遠の時間味わうつもりでいたようだが——

「……桃華、もうそろそろ……っ♥」

「えー……んん、いいよ♥美桜ねえに免じてー」

美桜に促されるがまま、桃華は”すっ”と距離を取り——

「……ほんとはねー、私も美桜ねえみたいに気持ち良くしたいんだけど……っ♥」

……私、処女破れて腰振る自信ないしー、だから……ねっ？」

布団の上で四つん這いになり——

あなたに、尻を向けてくるのだ。

白無垢を脱ぎ捨てて、春野桃華は一糸まとわぬ全裸になっている。

三流の女子が着用すれば、野暮ったく見える制服であっても——それを桃華が着こなせば、さながらテレビドラマのヒロインのような、圧倒的な世界観を醸し出すのだ。今が旬の超人気若手女優。一千人のエキストラに囲まれても、一目で存在が煌めくような極上の美少女と同じジャンルなのが、春野桃華であり——弟としての鼻肩目を抜きにしても、春野美桜と春野桃華は彼女達よりも圧倒的に美しいと思っていたのだが——

世界一制服の似合う美少女が——

「ん？……どうしたの……っ♡お姉ちゃんに後ろから覆い被さって、いっぱい腰振って……っ♡いじめればいいんだよ……っ♡処女破られたらあ、痛くてしょうがない女の子……好きなだけいじめたいんだよ……っ♡」

素っ裸になって、わんわんポーズというそれに——

あなたの理性は、ぐずぐずに蕩けていく。

桃華の大きく豊満な——名を彷彿とさせる”桃尻”がぷりんと、艶美な曲線を描いている。シミの一つも出来ない、真っ白ですべすべな肌からは——しかし、濃厚な雌の匂いが漂っている。常に汗を流して、汗腺に老廃物が詰まる余裕もない美桜とは違い、春野桃華というのはインドア派。正座をしているのが似合う少女は、即ち、尻の匂いも——振りまいた香水や媚薬を遥かに凌駕した、雌のフェロモンがムワムワであり——

二人の少女に暴発射精をさせられて、美桜の膈内になっぶりの精液を注ぎ込んだのに——

「む……っ♡流石だな、貴様……っ♡」

あなたの肉棒は、ガッチガチの最大硬度に隆起している。

ペニスの成長というのは、自分の年齢で頭打ちになることはないのだ。その上で——あなたの肉棒は、二人の少女と風呂に入る度に、汚れが溜まらないように皮の内側まで洗っているのだ。包皮が伸びている仮性包茎だが、剥くことは容易であり——爆乳で、ケツのデカい、ボンキュッボン美少女二人と同じ生活をしているのだ。だから、これはまだ発展途上だから——と、桃華のデカ尻の前では引け目を感じるような肉棒を、彼女の秘部に”くちゅりっ♥”と押し当てる。

だが——

”あれ？あれ？”

と、あなたは無様に腰を動かす羽目になるのだ。

桃華は今、秘部も肛門もあなたに晒け出しているのだ。周りの男達がそれを眺めれば、一生物のおかずにするような贅沢な光景。あのお淑やかな春野桃華にも、膣があり肛門があるという事実は、それを視認しない限り——いや、双眸に焼き付けたとしても、脳が許容しないのかもしれないものであり——

「ん……っ♥焦らすのー？……なまいき……っ♥」

あなたは、囁かずも桃華を焦らすことになるのだ。

先ほどは美桜が主導で、腰を落としてくれたのだが——あなたが主導権を握った途端に、どうすることも出来ないのだ。穴は確かにそこにあるはずなのに、腰を振っても滑るばかり。「ふむ……っ♪興奮して、ぬめぬめで……滑ってしまうんだろう？」と美桜は、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、あ

なたと桃華を挑発する言葉を吐く。「女の子のおまんこに入れられないから、お姉ちゃんに手伝ってもらおう」という一言を吐くほどに、あなたは雄を捨てられない。だから、”ええい、何度もトライしていれば、いつかは挿入るだろう”と開き直るのだが――

「ん…………っ♥…………あっ♥はあ…………んふ…………っ♥

…………いつからー、そんないじわるになったの…………？」

桃華は――

あなたのそれに、耐えられなかったようだ。

股越しにあなたの肉棒を”むんずっ♥”と掴み――自身の膣口に、亀頭を押し当てる。あの春野桃華が――あなたという雄を待ちきれずに、自分から啜え込むという状況。彼女達に二発の搾精をされていなければ、到底、耐えきれなかったであろう快樂であり――

「ほら…………おいで…………っ♥」

桃華に「後は腰を前に突き出すだけ」というところまで、何から何までお膳立てしてもらい――  
あなたは――

”にゅぷぷぷぷ…………ぬっちゅんっ♥”

「あぐ…………っ♥あっ♥はあ…………んぐっ♥うう…………っ♥」

「うわ…………っ♪すごいな、貴様…………っ♥

たった一晩で、春野家の双子姉妹の処女…………奪ってしまうだなんて…………っ♥」

桃華の膣内に、肉棒を挿入した。



普段は厳しく、時折優しさを垣間見せる美桜とは違い――

普段は優しく、時折厳しさが垣間見えるのが桃華だ。

美桜が姉で桃華が妹でも――双子姉妹の彼女達は、ほとんど同列だ。桃華は静かに怒るタイプだ。

彼女が本気で激怒すれば、その冷たい笑顔の前では、あなたも美桜も正座して受け入れる他になく――

――あなたにとっては、絶対に怒らせてはいけない存在である春野桃華が――

”ばちゅんっ♡にちゅっ♡にゅぶっ♡ぶちゅっ♡ぐぶっ♡ぶぢゅっ♡”

「おっ♡おお……っ♡ふ、う、ん♡あっ♡はあ……んきゅ……っ♡

ううっ♡んぐ……っ♡おっ♡おお……っ♡

「うわうわ……っ♪桃華の喘ぎ声……ふふっ♪可愛らしいなあ……っ♡」

あなたのピストンによって、淫らな低音の喘ぎ声を奏でているのだ。

窮屈な膣肉は――先ほどの美桜とは違い、ふんわり、柔らかに肉棒を包み込んでくるのだ。ふかふかできるところ、天日干しの布団にダイブしたときの心地よさを彷彿とさせるのが桃華の膣肉であり――あなたは夢中になって、激しく腰を打ち付ける。

童貞を卒業した身としては、処女である桃華をリードするようなピストンで、彼女をトロトロに蕩けさせる義務があるのだが――あなたには、そんな難しいことが出来るはずもない。ずっと憧れながらも、いつか、誰かに手折られることが確定していた桃華が――今は、あなたに組み伏せられて、尻を突き出し快楽を貪っているのだ。あなたのまだ成長途上のペニスですら、窮屈に感じるほどのギチギチの膣内。

「ふむっ……血が出てきたな……っ♪」

あなたと桃華の結合部から、一滴の血が垂れてくる。

処女膜を破ったという感触は感じられなかったのだが——それでも、彼女の”はじめて”を奪ったことに間違いは無いのだ。美桜は言葉を弾ませながら、にやりと笑みを浮かべて、そこに指を這わせる。白魚のように細く透き通った指に、一滴の血が浮かび——”ペろっ”と舌を這わせて、それを舐め取るのだ。ともすれば猟奇的な光景であっても——そこに存在するのは、あなたという雄の欲情を煽る極上の雌だけなのだ。

そんな姿ですら美桜にはサマになっていて、あなたは激しく劣情を催し——

”ばちゅんっ♥にゅぶっ♥おちゅっ♥ぐぶっ♥おぢゅ♥にゅぶっ♥ぐぶぶ……っ♥”

「ふふ……っ♪たまらないなあ、あの春野桃華の膾肉は……っ♥貴様だけではなく、村中の全ての雄がいやらしい目を向けているんだぞ……っ？春野家の美桜の方は、簡単に近寄れば手首をへし折られるやもしれぬが……桃華の方は見ての通り、押しに弱そうな女……っ♪のらりくらりと逃れることに長けても、体育倉庫で押し倒せば後は簡単だ……っ♥運動不足の、インドア派の、尻がバカみたいにデッカい大和撫子……かくんたんに食べられてしまうんだからな……っ♪」

あなたのピストンは激しくなり、美桜の囁きは加速していく。

嘘や冗談はあまり吐かない性質の美桜であり——故に、彼女から囁かれる妄想に、あなたの興奮は激しくなるのだ。雄というのは、生存本能を脅かされたときに最も性欲が昂ぶるのだ。春野桃華という、極上の92センチGカップの美少女を寝取られるというのは——雄にとっては、死と同等の恐怖

である。処女膜を破り、彼女のデカケツを鷲掴みにして、腰を叩きつけながら——おまけに、94センチHカップの彼女の姉に乳を押しつけられ、誘惑をされる光景。全てが、あなたという雄一人のみ許された特権であるが故に——そのギャップに、たまらなく興奮をして——

「ほら……よく見ろ……っ♪

あの春野桃華の……肛門だぞ……っ♡」

美桜は、どうやらあなたに本気で射精させる気であるらしい。

「あぐっ♡んんっ♡ふう、んっ♡やっ♡

おしり、の、あなはあ……んんっ♡やー……やだあー……っ♡」

桃華の抵抗を無視して、美桜はそこを広げさせる。

春野桃華にも、肛門が存在すると言う事実——

”ごくりっ”

と、あなたは生唾を飲み込んでしまう。

異常性癖というわけではないのだが——春野桃華というのはどこか、実在感を感じさせないことが多々あるのだ。夕陽に照らされて、物憂げに花を眺めている桃華を見て真っ先に浮かぶ言葉は「逢魔が時」だ。彼方と此方が交差する世界。あなたがライトノベルの主人公ならば、桃華は人間と妖怪のおそらくはハーフ。メインヒロイン特有の属性過多を背負っていそうな彼女は——ふと、一陣の風が吹けば、一瞬で姿が消えてしまいうような儚い存在であるのに——

”ひく……っ♡ひくっ♡”

春野桃華には、しっかりと肛門がついているのだ。

桃色で艶やかな肛門には、余分な無駄毛の一本も生えていない。先ほどの風呂場で、彼女はその毛の処理もしたのでろうか。和服が似合い、お淑やかで、幻想的な雰囲気のある彼女が——鏡の前に、尻穴の毛を処理しているという光景は、あまりにも倒錯的すぎて——

「ほら……っ♪尻穴に指、入れてみる……っ♡」

美桜に唆されるがままに、肛門に人差し指を”ぬぷ……っ♡”と挿入れると——

「んぐ……っ♡あっ、あっ♡はあ……んんっ♡おっ、んぎゅ……っ♡」

「ふふ……っ♡どうだ？貴様の姉はなあ……尻の穴が弱点なんだぞ……っ♡」

桃華の膣肉は”ぎゅうっ♡”と、あなたの肉棒を締め付けてくるのだ。

クドいようだが——春野桃華という女は、大勢の男達にとって憧れの高嶺の花なのだ。この異常な村であっても、桃華を汚してはならないと思っている雄がいるほどであり——そんな彼女が、尻穴に指を突っ込まれて、まんこをきゅうきゅうと締め付けてくる状況。男の子の理性を蒸発させるには十分すぎる代物であり——あなたは、何度も何度も激しく腰を叩きつけていく。最早肉棒は、膨張の限界をとっくに超えている。「これ以上興奮したら、破裂しちゃうのではないか」という不安が、冗談ではなく本気に感じられるほどであり——

「ほら……っ♪お姉ちゃんのおまんこにびゅーびゅー……っ♡先っちょを奥に擦りつけてえ……っ♡どくどく……っ♡ゴムなしびゅっびゅ……っ♡ぜっったい気持ちいいぞ……っ♡」

美桜は——

背後からあなたに抱きつき、豊満な乳房を背中に押しつけて――

あなたの乳首をカリカリと引っ掻きながら、耳元で囁いてくるのだ。

どれか一つでも、健全な男の子をオナ狂いにさせてしまう美桜の魅力が――今は、全てまとめてあなたに降りかかってくるのだ。射精の仕方がわからなくなるほどに、あなたの快楽はオーバーフローしている。耳穴に舌をねじ込まれると、もう、股間の肉棒が溶けてなくなってしまったのだと確信を抱くほどであり――互いの境目もぐちゃぐちゃになった頃に――

「ほら……っ♡わかるか……？桃華の膺がヒクヒクして……っ♡

貴様が腰を振る度に、痙攣してるの……っ♡

あはっ♡……もうちよっとだぞ……っ♡

もうちよっとで……桃華がいくんだ……っ♡」

美桜の言葉が注ぎ込まれて、あなたは限界だ。

腰を激しく叩きつけるのは、もう、我慢をしないからだ。あなたの中にあるちっぽけな雄は「早漏だと、二人に幻滅をされるかもしれないから」という感情に従って必死に我慢をしていたのだが――目の前で尻を突き出して、四つん這いであなたの雄を受け入れている彼女は、それがたまらなく愛おしいと頭を撫でてくれるのだ。暴発お漏らし射精ですら、頭を撫でて甘やかしてもらえる、愛情たっぷりのママ二匹とのイチャラブ濃厚交尾において、これ以上の我慢をすることは不可能であり、あなたはただ、一心不乱に腰を叩きつける。”ふっ、ふっ”と荒い鼻息が漏れるそれは――美桜にとって「あゝ……かわいすぎる……っ♡」と喜ばせる代物であつたらしい。あなたの頬に、無限にも思える

回数キスの雨を降らせてきて——桃華が「んっ♥あっ♥」と喘いでいた声は、最後に一度、腹の奥底から響くような低音で「んんんん……っ♥」と低く唸り、膣肉を”むっぎゅっ♥”と締め付けたところで——限界を迎えて——

「ほら……射精せ……っ♥」

美桜に促されるがまま、あなたは肛門の力を”ふっ”と抜き——そうして——

”びゅるるるるるるるるるるるるっ♥どびゅどびゅっ♥びゅっ♥”

”びゅくびゅく……どぐっ♥ぶぶゅっ♥びゅるるる……っ♥びゅくんっ♥”

”どく……っ♥びゅる……っ♥びゅっくん……びゅ……どぶっ……っ♥”

”……っ♥”

あなたは、桃華の膣内に射精した。

彼女の尻を両手で鷲掴みにして、指の間からは媚肉が”むぎゅっ♥”と溢れるほどの豊満さ。尻肉を引き寄せて、股間との距離を○に密着させて——避妊具なしの肉棒が暴れ回るのだ。ぬめぬめの膣ひだの中で、あなたの肉棒が射精をする。普段の右手での自慰行為とは比較にもならない——春野桃華のデカケツに、肉棒を埋めながらの吐精。びゅくびゅくとどくどくで、肉棒が弾む度に彼女の膣内の感触が響いて——、半日我慢をして、膀胱を酷使した後に開放感たっぷりの放尿をするような射精がびゅるびゅると肉棒から放たれて——

「ふふ……っ♪桃華のまんこは、そんなに気持ち良かったか？……んっ、すんすんっ♥……射精しているときの雄の匂いは、何ともたまらないと雑誌に書いてあったが……本当だな……っ♥このだらし

ない、雄のフェロモン……っ♡据え膳に上げ下げまでしてもらえる……贅沢たくっぶりを味わってる……っ♡雄として最高を堪能している匂いは……たまらないな……っ♡

あなたは、美桜に頭皮の匂いを嗅がれるのだ。

背後から爆乳姉妹の姉の乳房を押しつけられて、デカケツ姉妹の妹の尻を鷲掴みにして——立ち小便よりも勢いのある射精が出来ている状況。雄として産まれてきた意味を理解させてくれるような、二人の献身的な奉仕。気持ち良くなりすぎたあなたは、腰が抜けてしまい、肉棒を引き抜くことも出来ない。桃華は四つん這いのまま、尻をぐりぐりと押しつけてくるのだが——美桜はあなたの身体ごと、肉棒を引き抜くのだ。

布団に尻餅をついたあなたの股間に——

「ふふ……っ♪さあ、一回ずつ済ませたから……っ♡」

「解禁だよ……っ♡私と美桜ねえの食べ放題……っ♡」

”じゅるるるっ♡あむっ♡れろっ♡ぴちゃ♡むちゅっ♡れるれるる……っ♡♡”

二人の美少女が、顔をもぐりこませてくるのだ。

四つん這い——どころか、上体をペタンと布団に押しつけた女豹のようなポーズ。小顔の美少女二人でも、あなたの股間ではぎゅうぎゅう詰めになるのだ。二人の美少女が情熱的に、愛情たっぷりに——肉棒を咥え込んで、睾丸に吸いつき、あなたという雄の欲情を煽ってくれる状況。お掃除フェラは、あなたの肉棒の勃起を区切りにすぐに終わり——美桜と桃華は、あなたに尻を向けてくる。赤く熱を帯びて、膣肉からはあなたが注ぎ込んだ白濁を垂らしている二人の美少女。つい数時間前までは、

これが他の雄の所有物になると思っていたのに——今は、二つの白桃を貪れるわけで、あなたは、本能のままに彼女達に跨がり、腰を振った。

私、春野美桜にとって――

自分の人生は、産まれてきたときには終わっていた。

村の風習が狂っていると気が付いたのは、私と桃華が五歳のときだ。双子で産まれた私達は、どこに行くにも二人一緒。村の男達は、私達が大きくなれば下衆な視線を向けてくるが、未就学児である私達は性の対象ではなかったのだろう。私達も子供であったので、彼らの「大きくなったらエロくなりそうだなあw」「姉妹井つてのもいいね♪」「二人の旦那になれる男は果報者だなあw」という言葉達は「なんか不快になるけど、何を言ってるかはわからない」であったのだが――

それに気が付いたのが、五歳のとき。

私と桃華の、本当の母親が亡くなった時のことだ。

元々身体の弱い人ではあったのだが――この狂った村において、彼女は最後まで適応することが出来なかったのだ。最後の一年は、心労でほとんど寝たきり。私と桃華を抱きしめながら「女の子に産んじゃって……ごめんさい……っ！」と謝られたことは、桃華にはわからなかったのだろうか――早熟だった私には、理解が出来てしまったのだ。

そのとき――

「ああ、自分は不幸なのだな」と理解をしたのだ。

私は剣道を始めて、美桜には華道と茶道を始めさせた。この村では、雌としての価値を高めることで不運を減らすことは出来る。精一杯努力して、最高の運に恵まれれば「結婚相手を決めることは出来ない」以外は、まあまあ、良い人生を送れるのかもしれないと妥協していたのだが――

それは――

村の中で犯されている女達を見る度に、私達の胸をかきむしる代物であったのだ。

男の子は精通を迎えると――途端に、雄として成長をしていく。桃華をからかう男子を私がやつつけても、彼らは「今に見ているよ」と強がる事が出来るのだ。それも――ただの、負け惜しみの言葉ではない。私達は十八歳になれば、自分の意志とは無関係にこの村の男に、身を捧げなければいけないのだ。人権を捧げ、貞淑な妻として娶られる立場。「昔、俺がセクハラしたときに咎めたよな、謝れよ」と指示されれば、全裸になり、三つ指を付いて土下座をしながら、足指を舐めて赦しを乞わなければいけない立場なのだ。

母の死後、引き取られた家では、夫婦がともに村の外を経験している立場。村の歪んだ因習をおかしいと思いつつも、しかし、一個人でどうにか出来る代物ではない。例えば――現代の法律を改正するにしても、たった一人の人間が何も出来ないのと同じ。それどころか――改革の為に行動を起こせば、村八分をされるかもしれないのだ。

私達のことを大事にしてくれる義父と、不妊気味だが優しい義母に育てられて――

私と桃華は、きつと、それだけで十分だった。

それでも――小学校に上がる頃には、亡くなった実母が私達に謝った意味が、二人ともわかるよう

になり——ああ、どうにも出来ないのだから、いっそ死んでしまいたいと、泣きながらベッドで語り合った夜もあったのだが——

”あのね……っ！”

あなた達に……弟が産まれるの……っ！”

何の因果か——

私達が引き取られてすぐに、義母が子を宿したのだ。

不妊気味だった彼女は「と、いうこともあって」で、私達姉妹を引き取ったのだが、すぐに子宝を宿した状況。テレビドラマの突飛な世界観であれば、私達は邪魔者となり、一家団欒の食事の時間には床で正座をして、食べ残しが出るのを待つほかになく——

という話になるのだが、現実はもっと狂っているの——

”キミ達二人が、勿論、それを望むのならばだけど——

うちの子を、もらってやってくれないか”

と——

羊水に包まれながら、恩知らずに母体を蹴り飛ばしている自身の息子を、義父は差し出してきたのだ。

とは言えど——絡まった糸を一本ずつ紐解けば、当然の話。義父と義母は、この村に染まった「女性の人権を捨てさせることに、疑問を持たないクソ男」に育てたくなく——私と桃華は、自分達が嫁ぐに相応しい男子が欲しかったのだ。「決定は今じゃなくてもいい、二人が十八歳になる頃に、ウチ

の息子は十二歳。そのときに判断してくれていいから」と――

産まれてきた弟には内緒にして、”花婿修行”が始まったのだが――

「……私はねー……弟くん、大好きだよ……っ♥」

桃華は――

中学生になる頃に、既に心を決めていたのだ。

血の繋がりが無い上に――しかも、相手はまだ小学校に上がり立てなのだ。思春期の私には、インモラルで悶々とさせられたのだが――しかし、彼女が望むのならば止める術もない。私も「自分を犠牲にして、桃華が助かるのならそれでいい」とヒロイックな気分浸っていたのだが（中一のとさなのだから、しょうがないだろう）。「……美桜ねえも一緒になればー？」と、義父と義母と実妹による説得を受ければ、私の中二病心も折れる他になく――

何より――

その頃には、私も義弟にメロメロになっていたのだ。

彼が産まれてきたときから「好きになりたい」と思っていて、春野家による英才教育を施してきたのだ。どこに出しても恥ずかしくない弟は、天真爛漫の明るさを持ちながらも、人を思いやる深い慈悲を抱いており――ああ、義姉という鼻肩目を抜きにしても、立派な男の子に育ち――

そうして――

私と桃華は、彼に抱かれたのだ。

私達がこの村の因習に悩んでいたように――彼も悩んでいたのならば、話は早かった。あるいは桃

華の「弟くんは、男の子に産まれてきたってだけで……お姉ちゃん達の救世主なんだよ……王子様なんだよ……」という囁きが効いたのかもしれない。心優しい我が弟は、ほっぺにキスをされるだけでトロトロに蕩けてしまい——お姉ちゃん達に夢中になるので、私も楽しくなり——

まあ、つまり、その——

春野美桜と春野桃華は、そうして、二人まとめて義弟の嫁として娶られることが決定したのだ。

### 三章

「ふふ……っ♪ジロジロ見られているな……っ♡」

「んー……見られるの、悪くないかもー……っ♡」

「ほら……っ♪もつとアピールしろよ旦那様？……春野美桜と春野桃華が誰の所有物なのか……っ♡んっ♡……腰、抱くだけでいいのか……？」

「お姉ちゃん達はクソザコだけどー……ご主人様は男の子だからー、他の男子と同格……っ♡僕様のお嫁ちゃんに手を出す、わっるゝい男子は処罰出来るんだぞーっ♡」

二人の美少女は――

今、あなたの両側で身体を押しつけてきている。

学校からの帰り道。熱帯低気圧が到来しているため、早めの帰宅を促されており――  
校門を出たところであなたは二人の姉に、いや――

二人のお嫁さんに、捕まったのだ。

あの後――

あなたは両親から。美桜と桃華と血が繋がっていないことを聞かされた。

動揺が薄かったのは、幼い頃から「だったらいいのになぁ」と懸想していたことと、あなた自身が春野家の血であったからだろうか。村の因習は、憲法や刑法とは違って曖昧な代物だが――故に、

「義姉」や「義弟」といった相手と関係を結ぶことは、慣例で認められていたのがあなたの幸いだ。

二人の妻を娶ることも——

女側がそれを望めば、ごく少数ではあるが認められている。

しかも——あなたの背後には、この村の土地を多く所有している「春野家」があるのだ。  
生まれて初めての虎の威を借りながら——

「ん……っ♡もっ♡と強くしてもいいぞ……っ♡」

「んふふ……両手に華だねー、ご主人様っ♡」

あなたは、二人の腰を抱いて帰り道を歩いているのだ。

周囲の男達の視線が、ジロジロと自分達に向いていることはわかっている。

この村において、女の人権というものは存在しないも同然だが——男は違う。男同士は飽くまで同格であり——女は、男の所有物であるのだ。普通の男ならば、嫁の貸し借りは当然のこと。だが——

男が拒むのならば、彼らは同格であるが故に何もすることは出来ないわけであり——  
あなたの妻となった美桜と桃華に手を出すことは、誰にも許されていないのだ。

勿論、あなたを脅迫すれば話は別だ。あなたを誘拐してポコポコに殴ったり、あなたの実家に火を付けるぞと脅せば、あなたに二人の嫁を差し出させることは出来る。村を通り越して、国による処罰が待っていたとしても——彼らにとつて、美桜や桃華と一発やれたのならば、それはおつりが来るわけであり——

「しようがないだろう……っ？貴様は弱っちいからな……っ♡」

お姉ちゃんが守ってやらないといけないんだ……っ♡」

「桃華お姉ちゃんも……悪い虫が付かないように見張ってるからね……」

お姉ちゃんが守ってあげるから、安心していいよー♥」

美桜と桃華は、さながらあなたの護衛気取りなのだ。

二人の少女がいれば、あなたに怖いものは何もない。二人の少女の細い腰に、華奢な身体つきであつても——あなたよりも、肉体的にも精神的にも勝っているのだ。まだ一八に満たない少女が強姦されそうなときに、悪漢を退治したこともあるのが美桜であり——あなたは安心をしていたのだが——

「しかし……お姉ちゃん達は安心出来ないな……っ♡」

「ふふふ……すっごい見られてるぞー」

「旦那様アピールが出来ない……弱っちい雄なのか？」

「誰のご主人様なのかー、みんなに教えないでー、無駄な期待を抱かせるのは意地悪だぞー」

二人の少女は——  
あなたの煮え切らない態度を、からかってくるのだ。

先日——あなたは、二人の媚肉を貪り膣内射精をしたのだ。

この村の男であれば、絶対に「この二人は俺様のものだぞ」というアピールを強くするはずだ。誰かの所有物の女であれば、他の雄には手を出すことが許されないのだ。それに比べて——あなたはただに二人の弟で留まろうとしている。「いや、二人がもう誰かに娶られているとは、知らなかったから」と言えば、美桜と桃華を強姦する罪が軽減されるのだろうか。そんなもの、知ったことではないが——

「本当にお姉ちゃん達のこと大好きなら……っ」

「アピールしろー……ご主人様……っ♥」

あなたは——

「んっ？……わかっているのか？ここは帰り道だぞ？

……私達を一目見ようと、わざと歩幅を縮めて、のろのろ歩く男子もいっぱいだ……っ♥

……そんな場所で命令をする意味が、本当にわかっているのか、貴様？」

美桜に、その命令を下すのだ。

彼女は「待ってました」と言わんばかりに、滔々と言葉を述べていく。

滑るような舌使いは、彼女が上機嫌である証拠。あなたを「常軌を逸した、お嫁さんのことが大好きすぎる雄」と扱ってくるくせに、その命令を少しも拒むことはなく——

「ほら……顎、あげろ……っ♥」

春野美桜は、あなたに覆い被さるように唇を重ねて——

”むっちゅ〜っ♥じゅるるるっ♥はむっ♥れるお♡ちゅぷっ♥むちゅっ♥ちゅっ♥ちゅっ♥”

「うわあー……美桜ねえ、大胆……っ♥」

あなたの口腔に、舌をねじ込んでくるのだ。

あなたは未だに成長過程であるから——と自分に言い聞かせているが、美桜との身長差は歴然だ。

彼女は毎朝の稽古を欠かさない。あなたや桃華が寝ている早朝から素振りをして——女子剣道部の朝稽古にも皆勤賞で顔を出しているのだ。だから、なのだろうか。美桜から感じる、若干の甘酸っぱさ

は汗の匂いだ。普通ならば忌避するべき代物であるのかも知れないが——目の前にいるのは、あなたと桃華を守るために強くなる鍛錬を毎日行い、汗腺に余分な老廃物の欠片も詰まっていないような、代謝のいい美少女なのだ。若干に漂う汗の香りは、雄の肉棒を隆起させる代物であり”ぐじゅっ♡じゅるるっ♡”と、あなたの歯茎まで美桜の舌肉で這いずり回られて、すぐに限界を迎えるのだが——

「はーい……お耳、塞いじゃいまーすっ」

桃華は——  
”がしっ”と、あなたの耳を背後から塞いでくるのだ。

村中の有名な美人姉妹が——片方が男の耳を塞ぎ、片方が唇を貪っているのだ。最初、あなたは桃華の行動の意味がわからなかったのだが——”じゅるるるっ♡ぐちよっ♡ぶぐぶぐ……っ♡じゅるっ♡ぶちゅっ♡”と唾液の水音が頭蓋の中に鳴り響いて——

桃華が、あなたを骨抜きにする気なのだと理解した。

抵抗をしようにも、彼女達の力には勝てないし——何より、極上の美少女から愛情たっぷり、脳味噌をトロトロにされているのだ。下半身の肉棒が隆起して、下着の中を我慢汁でドロドロに汚しているそれは——全てが、あなたのお嫁さんからの愛情たっぷりのご奉仕。周りの男達が、思わず足を止めて見惚れていることを考えている余裕もなく——

「んちゅっ♡じゅるるるっ♡れぶれぶ……っ♡ちゅっ♡むちゅ〜……ぶ……はあ……っ♡  
……ふふっ♪接吻はまだまだ……練習が必要だな……っ♡」

美桜は、あなたから唇を離した。

互いの舌先に、唾液の糸がつつと架かる光景。誰かと誰かのディープキスを眺めることはあつても——自分の目の前に、美桜の美しい顔立ちが存在するのは、あなたにとっては新鮮すぎるのだ。彼女もまた、あなたが夢中になってくれたことが嬉しかったのだろう。周囲を見回すと——男達は何も悪いことはしておらず、どころか、目立つ理由は公然わいせつをしているあなた達のはずなのに——

彼らは、”さっ”と視線を逸らしていくのだ。

あなたは、勿論彼らに比べれば、雄としての魅力には乏しいはずだ。

身長も、筋力も——、逸物の大きさに至るまで、あなたは自分がまだまだ成長するという前提で人生を生きている。だからこそ、現状では彼らに全てが劣っていると納得が出来るのだ。

だが、彼らにとってあなたは見下される存在であるのも、事実。

彼らはあなたとは違い、いつか来たる日には雌を屈服させて、全裸土下座をさせながら足を舐めさせる気満々。人間としては最低ランクであっても、雄としては最上級であるというのに——

自分よりも遥かに劣った雄が、極上のエロ雌二匹と愛情たっぷりのペロキスをしているのだ。

あなたよりも、ずっと大きな屈辱を抱えているに違いない。

村が誇る、春野家の美人双子姉妹が——ただ、春野家に生まれたというだけのあなたに奪われているのだ。村でも大きめの権力を持つ上に、どんな成長をするかもわからない孤児を十二年間育てた家なのだ。この村の因習は、飽くまでも「立派で尊い制度」である以上——肉棒を隆起させて、性欲を剥き出しにしたまま感情的にそれを否定することは、村長ですら出来ることではないわけであり——

「次は……桃華お姉ちゃんの番だよ……っ♡」

美桜と桃華の双子姉妹があなたに嫁ぐというのは——  
彼らにとっては、一種のNTRなのだろう。

二人が誰かに寝取られることばかり、あなたは考えていたが——今では、あなたは二人を寝取っている間男の立場だ。ムクムクと下腹部から湧き上がる、邪な優越感。美桜ならば、不健全であると切り捨てるようなものだが——

「……見せびらかすの、興奮するよね、わかるよ……っ♡」

桃華は、あなたの仄暗い感情にも肯定を示してくれるのだ。

彼女は——

”す……っ♡”

「ほら……♡チューするときはあ……リードしたいでしょ？」

膝を曲げて、その場で中腰になり——

あなたよりも、頭を下にするのだ。

普段は二人の少女を、あなたが見上げなければいけない立場。それが、今は見下した位置に桃華の美少女顔があり——”んっ♡”と、目を瞑り、唇を突き出している。

俗に言う”キス待ち顔”は、すなわち——

「ふふ……っ♪貴様が、桃華にキスをするんだ……っ♡

衆人環視で……大勢の雄に見られて……っ♡

殺意にも似た嫉妬の視線を浴びながら……

この女は俺様のものだぞ……と、アピールするんだ……っ♡

あなたが、桃華にキスをしなくてはいけない、ということだ。

二人の姉の大好きな弟として、あなたはいつも、彼女達から一方的に愛情を捧げられてきたのだ。

玉座に腰掛けて、献上されるそれを一方的に貪ってればいい立場から——

「ん……っ♡まだ……？唇乾いちやうよ……っ♡」

桃華に、愛情を捧げる立場へと変更しているのだ。

キスの仕方など、あなたにわかるはずもない。それでも、「じゃあ、お前がいらぬのなら」と桃華が奪われていいはずもない。いつも良い匂いのするリップクリームを携行している彼女。肌身離さ

ずそれを持ち歩き、少しでも目を逸らす瞬間があれば、悪戯対策に廃棄をしなければいけないのが、

極上の美少女なのだ。ぷるぷるでもちもち——幼い頃からあなたを溺愛して、頬やうなじや首筋にキ

スをしてくれた、その唇に——あなたは——

”……………ちゅっ♡”

「……………っ♡」

どうにか、唇を触れさせるのだ。

桃華の肩を、あなたは両手で掴む。

華奢でか細く、少しでも力を込めれば、簡単に壊れてしまえそうだ。心臓がバクバクと弾むのだが

——背後から美桜が、あなたを抱きしめて「ほらほら……っ♡どうした？そんな情けないキスで、嫁

を虜に出来ると思うか……？」とからかいの言葉を囁いてくるのだ。桃華は片目だけ開けて、あなたの反応を伺い——そして”にやっ♡”と笑みを浮かべる。挑発されたようなそれに、あなたの肉棒は更に苛立ち——何度も何度も、激しく、桃華の唇を貪ってやる。

”じゅるるるっ♡むっちゅっ♡れろれろっ♡ちゅぶっ♡じゅるるるっ♡”

何度も繰り返すが、あなたのキスは下手くそなのだ。

熟練の技巧を持ち合わせていれば、互いに唇を密着させて、ナメクジの交尾のように舌肉を絡め合わせて、一つにして、濃厚な密着を行えるのかも知れないが——下手くそあなたでは、桃華の唇との間に距離が出来て、どうしても唾液がぼとぼとこぼれ落ちていくのだ。しかもそれは——地面のアスファルトを濡らすのではない。豊満な胸部の桃華と、あなたの背中に覆い被さる美桜がいるのだ。ふんわりと、まあるい桃華の胸部に——

あなたと桃華の唾液がブレンドされたそれが、落ちていくのだ。

地面ならば、給水しきれない分が水たまりになるのだろうが——桃華の制服にはいとも容易く、唾液の雫が染みこんでいくのだ。丁度、彼女の谷間の部分だけが濡れて、透けて見える状況。桃華は、それが愛おしいのだろう。「早くキスを上達しなければ、他の男に痴態を見られてしまうぞ」とアピールをしたいように——唇を離れた後も、あなたの耳や頬や顎をペロペロと舐めてくる。

「ふふ……っ♡大胆だな桃華……どれ、私も……っ♡」

やがて、美桜もそれに混ざって、あなたの首から上にペロペロと舌を這わしてくるのだ。

「いつか来たる日に備えて」と、二人の少女は、口の中でサクラランボの茎を結ぶ程度の舌使いをマス

ターしているのだ。あなたの顔中をペロペロと舐めてくるそれは、こそばゆさと快楽を同時に与えるもの。普通の女ならば、乾いた後の唾液は悪臭でも——春野美桜と春野桃華は、それぞれがHカップとGカップの、雄を誘惑する最上級高級遺伝子の持ち主であるのだ。彼女達は、汗の匂いですらも雄を欲情させるフェロモンを放っているのだ。蠱惑的な唾液は、どこか桃の花の香りを漂わせるものがあり——ああ、故に大勢の雄は、彼女達を孕ませたいと、無意識にその尻に視線を向けるわけで——

”……ポツ”

「んっ？」

”ポツ……ポツ、ポツ、ポツポツポツ”

「あっ、雨……っ」

二人に顔中を舐め回されて、夢中になっていたので——

気が付くのが遅れたのだが——

「そうか……台風だと言ってたな……」

「うっわー……これ、やばいかも……」

空から降ってきた一滴の雫は——すぐに、二滴三滴と増えていき、やがて”ざあざあ”と滝のような豪雨になる。あなた達に見惚れていた男子生徒達は、蜘蛛の子を散らすように去って行く。「ほらっ、走るぞ」「急いで帰ってお風呂だー」と、二人の少女はあなたの手首を掴み——それから、駆けだしていく。雨でびしょ濡れになっても、帰った後はお風呂場で、春野美桜の96センチHカップと、春野桃華の94センチGカップの爆乳をスポンジにしてもらい、あなたは包皮の内側まで洗ってもら

うことが出来るのだ。人生で初めて、豪雨に興奮をしている状況であり——なので、二人に興奮がバ  
レるのはすぐのことであり「ふふっ♪前屈みになって、どうした?」「家まで我慢できない?……じ  
ゃあー、あそこのバス停ねー……っ♥」という提案のままに、あなたは、屋根付きのバス停へと連れ  
込まれた。

「ふう……それにしても、ふふっ♪凄い雨だなあ……っ♥」

「お姉ちゃんねー、肌弱いからあ……強い雨はあ、苦手ー」

「思いつくなあ……雨の中で素振りしたら、風邪引いて死んじゃうからと貴様に泣かれて……辞め  
ざるを得なかったのを……ふふっ♪覚えているか?」

「美桜ねえのあれ、絶対にバカだと思っうー」

「……まあ、雨の中で素振りをすれば、困難の分だけ強くなれると……そんな勘違いをしていた時期  
もあったんだ……ふふっ♪……なっ、どうした?」

「さっきから、心ここにあらざって感じだねー?」

あなたは今——

屋根付きのバス停で、濡れ透け爆乳姉妹に挟み込まれている。

村と、村の外を繋ぐバス停は一日に二本だけ。朝と夜にだけ訪れるそれを逃せば、村は陸の孤島のようなものだ。だからこそ——大嵐に備えて、早めに下校をさせられた今は、部外者の乱入を恐れる必要もないのだが——

「……見せびらかしてもいいと、言ったはずだが？」

「お姉ちゃん達の人権は……ご主人様のものだよ？」

二人の美少女は——

あなたのその、臆病な態度がたまらなかったのだろう。

雨に濡れて、スケスケになった二人の少女。制服越しに、ブラジャーの黒が透けているのだ。大人びた黒のレース付きの下着は——何も、示し合わせているわけではない。胸がデカすぎる彼女達は、自身の身体に似合うランジェリーが既製品にはほとんど無いのだ。僅かな選択肢の中で「まともなやつ」を選んだ結果が、凶らずもお揃いのものであり——

それは、あなたにとって——

いや、男にとってたまらない興奮であるのだ。

双子ではあっても二卵性。顔立ちは似ていても、雰囲気もタイプもまるで違う二人の美少女が——しかし、全く同じ下着を着用しているのだ。下半身はスカートに包まれているので、上半身の透けブラとは違い、見えるはずもないのだが——

「しかし……雨で身体が冷えたな……っ♡」

「触ってみてー？すっごく冷たいでしょー？」

二人の美少女は——

わざと足を上げて、あなたに下着を見せてくるのだ。

布地が少なめな三角形に——視線を奪われない男がいるのならば、連れてきてほしい。「見てはいけない」と理性がわかっているでも、「でも、見ちゃう」のが本能であるのだ。しかもそこにいるのは——あなたの視線を喜び、ニヤニヤと笑みを浮かべる美少女達。美桜の剣道で引き締まった太腿も、桃華の柔らかい媚肉がたつぷりと詰まった太腿も——どちらも分厚く、噛みついて歯形を残したくなる魔性の代物。どちらが上、というわけではない。どちらも、ともに、違った山の頂にある極上の太腿であり——

彼女達はあなたの手を掴み、そこを触らせるのだ。

雨で濡れた肌は冷たくなっているが——同時に、高い湿度はムワムワと濃厚な熱を放っている。二人の美少女はあなたに太腿を触られて「あっ♡」「んんっ♡」とわざとらしい嬌声を響かせている。二人が腹の奥底から響かせる雌の声を、あなたは知っているのだ。本来ならば、そのわざとらしい、嘘の喘ぎ声に反応する道理はないのだが——彼女達が男を挑発するために響かせる”嘘喘ぎ”に、あなたの本能はどうしようもなく反応してしまい——

「——えいっ♡」

「つかまえたー……っ♡」

”がしっ♡♡”と、あなたの掌は——

美桜と桃華の太腿に、挟み込まれるのだ。

「んっ……♡あはっ♡あまり、モゾモゾするな……っ♡」

「やんやんっ♡痴漢さんえっちですー……っ♡」

あなたは逃げようとするのだが——当然のように、極上の太腿の締め付けからは、逃れることが出来ない。精神的にもそうであるのだが——彼女達の肉厚な太腿による締め付けは、あなたの細い手首くらいは簡単に拘束できるわけであり——

だから、あなたが手を動かして逃げようとする——

「ん……っ♡あっ♡こ、こらあ……貴様……っ♡」

「んん……っ♡んふふー♡これ、はあ♡ほんとに気持ちいいんだよ……っ♡」

どうしても、彼女達の恥丘に触れてしまうのだ。

熱を帯びたすべすべの触り心地の奥に——以前、あなたの肉棒を包み込んで、たっぷりと気持ち良くしてくれた洞窟が存在するのだ。最初は、本当に逃げるつもりで手を動かしていたのだが——途中からは、欲望が頭をもたげていた。下着越しに感じる、彼女達のクリトリスの感覚。直接触れるのではなく、一枚の布地を隔てることにより——あなたの、少し乱暴な手付きが丁度良く感じるのだろう。……ふふっ♪生意気だなあ……っ♡お姉ちゃん達の、んっ♡クリトリスをカリカリ……っ♡焦らし……弄んで……っ♡とんだヤリチン様になったようだな、貴様……っ♡

「んー……っ♡あっ♡わたくし、これー……ほんと、やばいかも……っ♡クリ、ね……っ♡ちよつと、敏感、だから……っ♡……ご主人様にいじめられるの……妄想して、いじってたから……っ♡」

「んんっ♡……私も、同じだぞ……っ♡ほらほら、どうだ？意地悪なお姉ちゃん達を、んきゅっ♡懲らしめる方法、見つけてしまったなあ……っ♡んっ♡はあ♡これから、はあ♡お姉ちゃん達が、生意氣をしたら……クリトリスこねこねして……お仕置きするんだぞ……っ♡」

「がっこーでも♡お外でも♡いつでも、いいよお……っ♡お嫁さんにはあ……あ・お・か・んっ♡……いつでもしほーだい……っ♡おねえちゃんもー、ていこう、しないから♡いっぱい……くりとりす、いじめていいんだぞ……っ♡」

二人の少女は、あなたの稚拙な愛撫に快楽を抱いて——  
更には、耳元で挑発の言葉を囁いてくるのだ。

雄の理性がグズグズに蕩けていく状況。あなたの肉棒は、ズボン越しに激しく隆起している。そこにいるのが「あなたに興味の無い女とのラッキースケベ」であれば、まだマシのだが——実態は違う。春野美桜と春野桃華は——、二人がともに、あなたの嫁。今すぐ、この場で勃起ちんぽを膣内に挿入して、射精をしたとしても——それがバレたとしても——「春野のとこの坊ちゃんは、旺盛だなあ」と笑われて終わりの”笑い話”で済むのだ。

あなたが一言、二人に命令をすれば——

彼女達は大人しくショーツを脱ぎ、バス停の壁に手をつけて、尻を突き出してくるのだ。

この村で育ち、男達の浅ましい性欲を間近で見てきたあなたにとっては——その命令を絶対の下しではいけない、と理性が叫んでいるのだ。一方で——美桜と桃華は、他の男ならばいざ知らず、あなたには王様として強引に振る舞ってほしいのだ。だからそうして、あなたの掌を太腿万力で強引に押

し潰して、耳元で淫語を囁き——あなたの理性を蕩かそうとしてくるのだ。

理性の薄皮を一枚剥げば、その奥にある本能は——、二人のお嫁さんへの種付けセックスを求めるのだ。どうか堪えねばならないと思い、あなたは歯を食いしばる。

自分でも、何を我慢しているのかはわからないが——

それでも、家の中や離れの蔵であればいざ知らず——

「野外での青姦セックス」を一度でも”あり”にしてしまえば、二人の魅力に、四六時中本能で腰を振る種付け猿になることが——どうしようもなく怖かったのだ。

だから、あなたは二人に懇願をした。

矛先を逸らすためのプレイを、だ。

「……ふふっ♪そんなに……これが欲しかったのか……っ♡」

「ご主人様のー……おっぱい星人……っ♡」

あなたは——

二人に、パイズリをしてほしいと頼んだのだ。

濡れ透け制服越しに見える、黒の下着と二人の谷間。豊満で、たっぷりと媚肉が詰まった極上の柔乳。窮屈なブラジャーで形を整えてはいるが——あなたはお風呂場で何度も、二人のその柔らかなさを堪能しているのだ。

あなたの思惑に二人は気が付くことなく、ベンチから降りて地面に跪く。

二人の膝が濡れた泥に汚れるのだが——彼女達は、少しも意に介することはない。「ちくしょう、

こんな献身的な奉仕を見せられて、我慢できるはずがないだろう」とあなたの股間は、憤りを抱く。

二人の美少女は、ぶちぶちとブラウスのボタンを外して――

”どたぶん……っ♡”と、豊満な乳房を露わにする。

流石に、ブラジャーを外す段階で僅かな羞恥心を感じるのだろう。あなたから視線を逸らして、二人は背中に手を回す。その羞恥の表情ですら――男ならば、ご飯三杯は簡単に進むに違いない。

彼女達はやがて、ブラジャーを外して”ぽいっ♡”とあなたに投げってくる。

雨垂れが染みこんだ下着は、あなたの顔面に”べちよっ♡”と水音を響かせて着地する。大勢の男子達が「どうにか、プールの授業中にこれを盗めないか」と画策しながらも――警戒心MAXの二人によって失敗に追い込まれた、春野美桜と春野桃華の脱ぎ立て生下着で顔を覆われながら――

「……んしょっ♡失礼するぞ……旦那様……っ♡」

「お姉ちゃん達のおっぱい……味わってね、ご主人様っ♡」

二人の美少女は、あなたの股間に潜り込み――

”ふっによっんっ♡”

”どたぶん……っ♡”

「んっ……冷たかったか？」

「おっぱいも脂肪だからねー♡」

あなたの肉棒を、挟み込むのだ。

単独でのパイズリでは、乳房の谷間に肉棒を挟み込むのだが――今の二人は、両側からあなたの肉



棒を押し潰す形になっている。あなたの肉棒は、二つの肉饅頭しか堪能をしたことがなかったのだ。それが今では、四つの果実があなたの肉棒に触れているわけで——脳味噌は、ただのそれだけでドロドロに蕩けていき、下半身へと落ちて——あなたの睾丸の中で精液として変換されていくのだ。

「んっ♡あっ♡すまない、な……っ♡乳が、冷たいだろ……っ♡」

「れるう……っ♡よだれ、たらしたらあ……ちよつと、あつたかい？」

「んっ……ぶっ♡ぶぶっ♡……ふふっ♡どうした？」

「おちんちに唾はかれて、興奮してるのー？」

二人の美少女は、あなたの肉棒に涎を垂らしていく。

表皮が雨風に晒されて冷えたとしても——身体の内側の熱というのは、簡単に冷めることがない。春野美桜と春野桃華の身体を、保温ポットの代わりにした、暖かく熱を帯びた三十六度前後の唾液口——ション。湯気が立ちそうなほどの熱を感じるそれに——

あなたは、唾を吐かれて興奮しているのだ。

美桜の唾液はサラサラであり——桃華の唾液はドロドロ。勿論それは、飽くまで「普通のと比べたら」による話。そもそもが、彼女達のバックボーンを知っているが故の、バイアスがかかりまくった認知なのかもしれないが——

スポーツドリンクのように爽やかで、濃厚交尾中にこそゴクゴクと喉を鳴らして飲みたくなるのが、春野美桜の唾液であり——

砂糖たっぷりの紅茶のように濃厚で、交尾の前と、交尾の後にこそ飲みたくなるのが、春野桃華の

唾液であるのだ。

性欲が爆発しそうな、健全男子高校生にとっては、三流のブスとのセックスよりも「極上美少女の春野姉妹が、口を拭いたティッシュ」をオカズにしてシコる方が、よほど激しい興奮を得られるのだ。自慰行為をして、肉棒をシゴきながら——、美桜と桃華に唾液を流し込まれる妄想は、彼らの定番であるのかもしれない。

そんな二人の唾液が——

「んっ♡少しずつ……ふふっ♡暖まってきたかな？」

「寒いときはーっ♡んっ♡いっぱい、こすこすしないとー……っ♡」

今、あなたの肉棒の潤滑を煽る、ローションの代わりに使われているのだ。

美桜はサラサラの唾液を”ぶっ♡ぶっ♡”と何度も吐き捨てて、桃華はドロドロの唾液を”つつ♡”と垂らしてくる。唾の吐き方にまで個性がある、双子姉妹。元より、彼女達の肌は羽二重よりも遥かに触り心地が良いのだ。

二人の美少女は——

”むぎゅっ♡♡”と、両側から乳房に圧力を掛けてくる。

眺めているだけでも満足が出来る、圧倒的な爆乳二つが——今、あなたの肉棒を挟み込んでくるのだ。背筋からゾクゾクと痺れるような快感が走り、あなたは足の爪先をぴんと伸ばしてしまう。二人の美少女にとって、あなたのそれは自分達の嗜虐性を刺激する代物であるらしい。大好きな二人が、あなたの雄に快楽を感じていれば、泣き出すまで責め上げたくなるのと同じであり——

「ほらほら……っ♡どうした、旦那様……っ♪」

「この程度でー、ギブアップは早いよねーっ♡」

二人の少女は、ここぞとばかりに乳圧を高めてくるのだ。

剣道一筋の春野美桜のおっぱいは、つんと先端が尖っているようなロケットおっぱい。茶道や華道で穏和な雰囲気の中野桃華のおっぱいは、ふんわりとまあるい肉饅頭だ。それぞれが、どちらも個性抜群であり、どちらも最上級であるのだ。爆乳美少女二人の乳房は——常に、クーパー靱帯を酷使しているもの。美桜がサラシを辞めたのは、乳房が垂れるのは嫌だという、至極真つ当な心配による代物。ポニテ剣道少女が、無粋なほどのデカブラを着用しているのは、また違った背徳感があるのだが——とにかく——

春野美桜と中野桃華の乳房は、国宝級の代物であるというのに——

「おしくらまんじゅう……っ♡」

「押されて泣くなよー……っ♡」

デカパイの型崩れを恐れることもなく——

二人の美少女は、最大の乳圧であなただの肉棒を挟み込んでくるのだ。

「お姉ちゃんのおっぱいはどうだ……っ♡いつもいつも……貴様を甘やかしてくれるおっぱいだぞ……っ♡貴様を逞しい雄にするために、時には手厳しい鍛錬を施すときもあったが……っ♡おっぱいはな♡どんなときだって柔らかいんだぞ……っ♡」

「昔のこと思い出したー？……一人で寝れないからって、お姉ちゃんのお布団に潜り込んできて……」

…っ♥大きくなってる途中の、まだ硬くて…触られるとジンジンするおっぱい、遠慮無く揉んできたよね…っ♥やだって言ったらあ、やめてくれるけど…っ♥いいよおって言ったらあ…朝までずっつと揉み揉みしてたよね…っ♥」

「私のおっぱいと、桃華のおっぱいを交互に揉み比べ…っ♥記憶にうつすらとあるか？…くふふっ♪私達の胸を揉みながら…たっぷり甘えて、朝にはおねしょをしーしー…っ♥あのとときに比べて、随分と成長したと思っていたが…っ♥」

「本質は、何も変わってないのかもね…っ♥ねっ♥どちのおっぱいがお好きですか…あっ、言わなくていいよ…っ♥反応でわかるから…っ♥」

ざあざあ、ざあざあと――

一歩踏み出した先には、一寸先も見えない豪雨なのだ。

屋根に覆われたバス停が、世界から隔離されたような錯覚に陥る。

二人の胸の谷間からは、白い泡がぶくぶくと。

粘度のある我慢汁が漏れて――それが摩擦されて、泡を立てているのだ。美桜はそれが何かかわからないようだが――桃華は察したのだろう。顔を近づけて、唇を尖らせて”ちゅるるっ♥”と吸い取ってから、もぐもぐと咀嚼して”ごっくんっ♥”と喉を鳴らして飲み込む。「そのカウパーですら、女の子を孕ませられるから、避妊具は着用しなければならぬ」と――村の人間は世間一般よりも遙かに早く、性教育で学ぶのだ。お風呂の中でおちんちんを硬くすれば、二人が孕んでしまうのではないかと、子供の頃のあなたは本気で脅えていたというのに――

「……やっぱりし、桃華お姉ちゃんのおっぱいがお好きー？」

桃華は——

あなたの我慢汁を、小豆ぜんざいよりも甘露であるかのように、飲み干してくるのだ。

小悪魔的な表情を浮かべる桃華の乳房は——顔を埋めて深呼吸をしたくなるようなもの。ホラー映画を鑑賞したときに、美桜はあなたと同様に脅える性質を持っているが、桃華は「でもほらー、作り物だからー」と平気であるらしい。あなたを抱きしめて、震えを解きほぐしてくれて——しかも、夜におしっこに行きたくなければ、彼女はついてきてくれるのだ。それも、まだ幼少であったあなたの雄のプライドを刺激しないように「お姉ちゃんおトイレ行きたいからー、かっこいい勇者様に付いてきてほしいなー……ついでに、おトイレする？」と言ってくれるほどであり——

あなたにとって、桃華の乳房はどこまでも甘えて、おねしょをしたくなる代物。

桃華の豊満な乳房は、手を離しても十分な乳圧をしているので——

”むっぎゅ〜〜♡”

「桃華お姉ちゃんの前では……甘えんぼでもいいよー？」

彼女は、あなたと片手を繋いでくるのだ。

優しく、目尻のトロンと落ちた瞳であなたを見つめてくる美少女。理性をグズグズに蕩かすのには、あまりにも十分すぎる代物。ああ、だめだ、出る、出る——と、あなたは限界を迎えるのだが——

”っね〜……っ♡”

「こら……っ♡そんな甘えんぼでは困るんだ……っ♡貴様は、私達の旦那様なんだぞ……っ？」

あなたの反対側の手を、美桜が抓ってくるのだ。

「桃華の乳が柔らかいのは、姉として認めるが……っ♡しかし、だなあ……っ♡貴様は……んっ、そんなに情けなく、可愛い顔をしていたら……ああ、ええと、つまり……」

「んふふー、美桜ねえ可愛いー」

「か、可愛いとはなんだ……っ！」

「言いたいこと、特にないけど……」

私のおっぱいのが好きって言われて、嫉妬しちゃったんでしょー？

「……………っ♡」

美桜は——

少しだけ潤んだ瞳で、あなたを見つめてくる。

その瞳が果たして、大雨に濡れた前髪をつたう雫であるのか。あなたには判断が付かない。まさか——かっこよく、凛々しく、あなたにとっての憧れである春野美桜が——「自分のおっぱいの方が好きだと言っただけ」と、涙目になっているわけがないと思いつつも——

「あ……………っ♡」

あなたは”むっぎゅっ♡”と、美桜のおっぱいを鷲掴みにするのだ。

優しさは桃華の方が大きい——美桜のおっぱいというのも、あなたは当然大好きなのだ。だが——その感情は、主に性欲が傾いているもの。母のように甘えたくなるのが桃華のまあるいおっぱいならば——美桜のそれは、むしろぶりつきたくなるおっぱい。スマートフォンを持っている、健全な男

の子なのだ。ネットの海には、言語の壁を越えた数多のおっぱいがあり――

布団の中に隠れて、それを見ながら興奮していたこともあるのだが――

春野美桜ほどにやらしい乳房は、海外の動画でも見たことがないのだ。

先端がつんと尖っているような、美桜のロケットおっぱい。自身が孕んだ子供を育てるための哺乳瓶としては優秀でありながらも――絵画や彫像で描かれる、均整の取れたまあいおっぱいとは正反対の代物。それは勿論、耳の形や指紋が人それぞれ違うのと同じで、個性で収まる範疇。性欲の滾らせた男の子は、美桜の乳房に抱くのは「エッロ……っ♡」でしかないのだが――本人にとっては違うのだ。春野美桜は、自分のその尖ったおっぱいが――まるで、世界で一番重大な問題であると考えている様子。世界中の貧困や戦争よりも、自分の乳房の形が周りの女子と違うことの方が大事だと思っており――鏡の前でポーズを取ったり、家の共有のパソコンで検索をしている姿は――

あなたという一匹の雄にとって、ちんちんがどうしようもなく痛くなるのだ。

春野美桜は強く、気高い、獅子のような存在なのだ。それが、自分のおっぱいの形に悩んで、ネットで見ただ何のエビデンスもない「おっぱい矯正マッサージ」を、お風呂に入りながらしている光景。そんなもの、嫌いになれるはずがないだろう。桃華の乳房がママのおっぱいであるならば――美桜のおっぱいは、妻にしたい乳房だ。肉棒を挿入して、腰を振りながら背後から覆い被さって先端を摘まんだり――あるいは正面を向きながら、正常位で、腰をへこへこ振りながら乳房をシゴきあげたくなるのが美桜のおっぱいであると――

あなたは、自分が十二年間ずっと抱えてきた感情を――

「そ……そ、そんなにや……ふうに、思ってたのか……っ♡」

思いの丈を全て、美桜に吐露するのだ。

「うわうわー……だいたーん……っ♡」

外は豪雨であり、あなたの秘密の話は誰に聞かれることもない。

この場にいる三人——あなたと、妻二人だけの内緒話。本来であれば、美桜と桃華が外に嫁ぎ、あなたは墓場まで持っていくつもりだったそれを暴露したのだ。美桜に幻滅されて、平手打ちで頬を打たれて、婚約破棄を申し出されてもおかしくないはずなのに——

「生まれて初めて、だな……」

この乳房が……誇らしく思えたことは……っ♡」

「私達のだ〜いすきなあ……っ♡ご主人様のオナペおっぱいなんだよ……っ♪んふふっ♡お姉ちゃんのおっぱいでもシコシコしてたのー？だめだよー？母性ふかふかおっぱいでシコシコしたらー、おねしょ、治らないよ〜？」

二人の美少女は、あなたに優しい笑みを浮かべてくるのだ。

それから——彼女達は、あなたの両手を片手ずつで握りしめてくる。

五指を絡めた恋人繋ぎ。力を入れる際に、手すりを掴むように——射精を我慢するための手すりとして、彼女達は片手を差し出しているのだ。上目遣いの潤んだ瞳に、頬は赤らんでいる。あなたへの大好きを隠さない、美桜と桃華のパイズりご奉仕。ハートマークが飛び交いそんなほどの大好きに、我慢をするのも限界だ。彼女達の両手を力一杯に握りしめる。男の子のそれを、女の子に受け止めて



「んっ……雨上がりの空はいいものだな……っ♡」

「うひゃー……足下、びっちゃびちゃ……っ♡」

美桜と桃華は愉快そうに、あなたの前を歩いて行く。

足下は泥と水たまりが浮かび、二人の少女は最初、あなたにおんぶを提案した。

「あなたが二人を交互におんぶする」ではなく——

「二人が交互にあなたをおんぶする」であるのだ。

男の子のプライドをズタズタに引き裂くそれも、彼女達には一切の悪気はないのだ。どうにかあなたは、それを拒否する。内心では、美桜と桃華におんぶしてもらえると、童心がワクワクと盛り上がっているのだが——

二人の旦那として、それを許容する訳にはいかないのだ。

「おんぶを拒否する」というそれが、誰に褒められるわけでもないで——あなたは、自分で自分を褒めてやる。二人の美少女は、無邪気に泥まみれ。帰宅をすれば、母に軽く叱られるのだが——美桜と桃華が元気であることを、何よりも喜んでいるのは彼女なのだ。多少の泥も、喜んでくれるのだろうか——

「ああ……ほら、見ろ……っ♡」

「虹……出てるねっ♪」

二人が指した先には――

雨上がりの空に、鮮やかな七色の虹が浮かんでいるのだ。

青春ドラマのワンシーンのような光景に、あなたの心臓はバクバクと弾み空を見上げるのだが――  
「なあ……帰ったら、お風呂でしような？」「お姉ちゃん達……今日は大丈夫な日だけどね……っ♡  
生えっちしたいなあっ♡」と二人は、あなたの耳元で囁いてくるのだ。男の子の肉体というのは、  
どうしようもなく単純であり――”むくむくっ♡”とあなたの肉棒は隆起する。二人の美少女は、  
ニヤニヤとあなたに抱きついてくるので、だから、普段の三倍の時間をたっぷり浪費しながら、あ  
なた達は帰路に着いた。